#### 法政大学学術機関リポジトリ

#### HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

翻訳の誤謬: 花袋、敏、鷗外のばあい

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
社会志林

(巻 / Volume)
59

(号 / Number)
2

(開始ページ / Start Page)
170

(終了ページ / End Page)
116

(発行年 / Year)
2012-09
(URL)
https://doi.org/10.15002/00021138

## 翻訳の誤謬

# ――花袋、敏、鷗外のばあい

## 宮 永 孝

林において刊行された。題して「エソポのファブラス(喩言)」という。 小アジア生まれ)が、 ヨーロッパの文学でわが国にいちばん最初に紹介されたものは、ギリシャの寓話作者アイソポス(前六二○ごろ~五六○ごろ、 口語で語ったものを編んだ『伊曾保物語』である。これは文禄二年(一五九三)キリシタンの僧によって、 天草の耶蘇会学 トラキアまたは

翻案戯曲のたぐいが、諸所においてたくさん刊行された。いずれにせよ、このイソップ物語こそ、キリシタンの教学の書を除くと、西洋文学翻訳(3) の嚆矢をなしている。 訳者は「平家物語」の口訳者である伊留満ハビアンであろうといわれている。ラテン語から平易な俗文体で訳したもので、その後同種本および(2)

という。 らんでいる。文学書だけに限っても、 日本は世界有数の翻訳工場でもある。 平成のこんにち、 その数ははるかにこれを凌駕しているはずである 明治初年から昭和三十年代半ばまでの間に刊行された訳書 いまそのスピードは鈍化しているとはいえ、 書店に行くと、 (重版をいれても)の数は、 相変らずあらゆる分野の訳書が目白押しにな 三万数千点にのぼる

「翻訳』とは何のことか。その定義とは何か。いまいくつかの国語辞典や漢和辞典によると、つぎのように説明される。

- ――ある言語で表現された文章の内容を他の言語になおすこと。『広辞苑』。
- ――ある国語で表された文章の内容を他の言語になおして表すこと。『学研国語大辞典』。
- ――ある国の言語・文章を同じ意味の他国の言語・文章にうつすこと。小学館『国語大辞典』。

# ――ある国語を他の国語に移し替える。角川『大字源』。

なお、 漢語 (中国語) にも 翻訳\* の語がみられ、 『隋書經籍志』 (巻四佛經) につぎのようにある。

至桓帝時、有安息國沙門安靜、齎經至洛翻譯、最爲通解。 (5)

(後漢の桓帝のときに至って、 安息國に沙門 (修業僧 安静あり、 經され (経文) をもたらし洛陽 (中国の旧都) にいたり、 翻訳し、 もっとも通解たり

(意味が通じ、りっぱな解釈になった)

要するに、 翻訳 ということばによって、ふつう一般に理解されていることは、 国語の移し替えである。(6)

なる。 った一種の現象が生じるのである。 の数がにわかに殖え、逐語訳の傾向がいちじるしくなる。そして明治四十二、三年ごろ、(9) 海外からわが国にもたらされた文献の翻訳事業は、 文学書の翻訳が現れるようになったのは、 およそ明治十年以降のようである。同二十年代に入ると、時代の欧化主義の影響もあって、 幕末から維新にかけて兵書が多く、 海外文芸の紹介がいっそう活発化すると、 明治初期には欧米列強の政治、 憲法の書の訳出が盛んと 誤訳指摘とい 訳書

明治以後、 わが国に入って来た西洋の学問 人文科学・自然科学にしても、すべてが西洋文明から拝借したものであり、ことばを変えていえ

ば、西洋学問の剽窃(かすめ盗む)であった。(11)

業のあやまちを指摘し、非難する者が現れるようになった。誤訳というものは、不可避なものであるから、訳書のなかに誤訳がないとしたら、 れは驚くべきことでもある。秀作は欠点が多いものとされている。 によって、 Н 本に在留する外国商人や日本商人らが輸入した文芸作品は、文学者によって読まれ、 日本文学は滋味に富んだものになっていった。しかし、 語学が発達し、 外国文に強い人間がふえるにつれて、著名な文学者や学者の訳 ときに文章の手本とされ、またそれを日本語に移すこと

本稿は明治・大正期を代表する文芸家 田山花袋、 上田敏、 森鷗外らの誤訳問題を取りあげ、 かれらに対する非難が、 はたして当をえたもの

であったのかどうかを明らかにしようとしたものである。また明治期における翻訳論 識者の意見を紹介しつつ、筆者の管見をのべたものである。 翻訳の心得や亀鑑 (てほん)、 翻訳のあるべき姿などを

\*

あり方についてのさまざまな意見である。 明治の二十年(一八八七)以降、 日本文壇は翻訳というものをどのように捉え、 何を心がけたのか。 つぎに引くものは、 明治人の考えた翻訳の

第十号所収 訳者の多くは、 明治期の翻訳王の異名をとった森田思軒(一八六一~九七)によると、 明治20・10)。 確定せる原則をもたず、暇なとき漫然と横文字を縦文字に更えているにすぎない、という(森田文蔵「翻訳の心得」『国民之友』 いまの翻訳をみると、 巧られ (じょうず・へた) はいろいろある、

(一八六四~一九〇九) 森田思軒といえば、 ヴィクトール・ユゴー(一八〇二~八五、フランスの作家)の紹介や翻訳で有名になり、「探偵ユーベル」 の嗜好書目のなかに加えられた。「ユーゴーの名遽に文壇を聳動せり」という(『女学雑誌』 第四三四号所収 は二葉亭四迷 明治30・1)。

学』第三号所収、 あげると三人おり、それを如来 訳に従事することを願う、といい、いま美文を翻訳して、 イツ語畑の如来は森鷗外、ロシア語畑の如来は長谷川四迷である(「外国美文学の輸入」『早稲田文 われわれは一日も早く、 明治24・11)。 世の技倆にすぐれた文学者が、 (仏の尊称) と名づけるべきという。 英文畑の如来は、 あたかも原作者をほうふつとさせる訳者を 未開の文学界をひらく手段として盛んに翻

田文学』第四号所収、明治24・11)。 国の詩歌を翻訳する者は、 ぬという。また原作者の国語を会得し、 つぎのようなものである。外国文を翻訳せんとする者は、 まずじぶんが詩人たることが肝要だという(「翻訳すべき外国文学」『早稲 かつ自国の語を自由にあやつれる者でなければならない。 まず国語に精通した批評家であらねばなら



除田忠則

ジョン・ドライデン(一六三一~一七〇〇、イギリスの詩人、批評家、

劇作家)

の翻訳論の大意は、

ことである(「翻訳」『太陽』第七号所収、 翻訳の要旨とはなにか。 それは自国にない、すぐれたおもしろ味を国民に知らせることであり、 明治27·12) なるべく有名な傑作や雄編(すぐれた作品)を訳する

に紹介されることを望みたい(「翻訳の真相」『帝国文学』所収、明治28・8)。 わが国の文壇をみると、 訳述 (翻訳) なるものは、 創作面において長足の進歩をみることなく、 七分の訳に、三分の創作を加えたものである。真正(本物で正しい)の翻訳によって、海外の傑作がひろく一般 翻訳もまたひじょうに幼稚である。 西洋の諸大家の傑作、 いまだわが国に紹 介さ

ぐるしいさま)を忍んでいるくせに、忠実なる翻訳者としてその名を公にすることをはばかっている(「翻訳時代」『太陽』第二巻第八号所収、 ならない。 日本人の思想は、 が、 わが国の翻訳者の中には、 まだはるかに十九世紀思潮の水平線に達していない。 翻訳者たることを忌避する傾向が生じてきた。学者の多くは、 われわれは外国書を翻訳することによって、 翻訳や翻案をもって自説とすることの陋態 国民の思想を高める手段とせねば 明 治 29 •

注入するのでなければ進歩は望めない。翻訳はこの点において最も有効な手段である。他国の傑作をわが国語に移して、読者の嗜好を高めることはいま そして序言の中で、人に目立たぬように「……氏の原著による」と記している(「翻訳者と原著者」『太陽』第二巻第九号所収、 はその姓名が二号活字であれば、原著者は四号ないしは六号である。はなはだしい例は、 わが国の学界においては、 わが国においては、 創作の才能に乏しいものは、往々にして翻訳に走るのが常である。一国の文学はつねに他国の文学と接することによって新思想を 原著者と訳者との関係はひじょうに奇妙である。 正直な訳者は、 原著者の名をすっかり省き、 原著者と同席することを許容する。 翻訳者の名だけをかかげている。 明治29・5)。 しかし、 多くの翻訳者

語に代えることではない。 に操縦し、味解する能力がなければならない(「西洋美文の翻訳者に告ぐ」『太陽』第二巻第一五号所収、 われわれは一般に翻訳を奨励するが、いかなる人にむかって、いかなる書を訳してくれとはいわない。翻訳とはみだりに字引にある訳語を採って、 母国の思想によって、渾然同化し、さらに母国語によって再製すべきものである。したがって訳者は彼我の言語をじゅうぶん 明治29・7)。 原

の文壇にとって必要なことである(「翻訳の気運」『少年文集』第二巻第六号所収、

明治29・6)。

費をもって翻訳するのもよい(「再び外邦書典の翻訳に就て」) いまや翻訳推奨の声は、 ほとんど社会の世論となっている。 国家の保護のもとに洋書の翻訳を奨励し、 もし国家にとって有用な書があれば、 これを官

外国文学の翻訳は、 国文学を盛んにする第一策である。 もし将来において、 国文学が盛んになる時期がきたら、 それは翻訳界が繁盛したあとでなくて

はならぬ(「翻訳物の読者」『帝国文学』所収、明治30・4)。

い文士は、覚悟をもって翻訳に従事せねばならない(「翻訳壇」)。 翻訳だけで食べて行こうとすると、粗雑になりがちである。粗笨 (あらっぽく、雑)を避けようとすれば、本業を持たねばならない。 生活の余裕のな

かりやすい文体にすべきである(「純文学以外の翻訳壇」『早稲田文学』第七年第十号所収、 原文に忠実なろうとするあまり、 依然として直訳のきらいがあるのは訳者のために惜しいことである。 明治31・7)。 直訳の語気をやわらげて、 一般読者にとってわ

欠点だらけである(『文庫』第二五巻第一号所収、 訳書をよむ人の多くは、 原文を味わうことができない人である。 明治37・1)。 かれらは翻訳を媒体として、 原文のおもざしを見ようとするのだが、

に果たした功績は大きく、 絶するものであった。 ッパの術語のほとんどすべては新奇なものであった。それらを精確に表現することばに乏しかったために、 \*鳥谷部春汀(本名・銑太郎、一八六五~一九○八、 欧文を翻訳するときにいちばん困ったのは、 訳語の多くは、 われわれは深く感謝せねばならぬ(春汀散史「明治の翻訳家(月日)」『文章世界』二巻一号所収、 、後年各学者によってしだいに修正され、また創作されたものも少なくなかった。これらの先輩諸氏は、 ヨーロッパ特有の術語を日本語に訳すときであった。 明治期のジャーナリスト)のこと。東京専門学校卒後、 政治、 はじめ翻訳に従事した学者らの苦心は想像を 法律、 『毎日新聞』『太陽』などで評論活動をつ 理科、 哲学、 明治40・1)。 文芸などに関するヨーロ 明治の文章

すのに一日か二日を費す場合も珍しくない(昇曙夢 識に乏しいので、原文がいくらよくわかっても、適当な邦語を考えだすのに手間がかかる。 つとめなければならぬ つねに「新」にむかって心がけているわれわれは、 原作のいろいろの方面に注意を払うようになって、文章以外の調子や情味を伝えなくてはならぬので、 (「翻訳の利益」『文章世界』七巻三号所収、 「研究と翻訳との十ケ年 翻訳をするに当って、 明治45・2)。 つとめて原文の表現の形式に重きを置いて、なるべく原文の味を出すことに -翻訳上の態度及苦心」『文章世界』第七巻第二号所収、 わずか一語 一句訳するのに手間がかかる。 筆の運びがひどくおそい。 もともと日本語の知 わずか一語 明治45・2)。 一句訳

\*

### 田山花袋

説の領域にもちこんだのであるが、その風潮はモーパッサン、ゴンクール兄弟、ドーデらにうけつがれた。わが国においては、 自 然主義とは、 人間の生態とか社会生活を直視し、 ありのままに描写することをいい、 フランスのエミール・ゾラ (一八四〇~一九〇二) 明治の自然主義勃 が小



宇品港出発のときの田山花袋。 より。

『早稲田文学』(明治41・1) うけ、 興の時期に最も強力な感化力をもっていたヨーロッパ作家は、 潮 ーパッサン(一八五○~九三)であった。 田山花袋(一八七一~一九三〇、明治・大正期の小説家)

英語で各国文学をよもうとしても、 まだ英訳本がひじょうに少なく、外国文学を研究しようとするとき、本がないのでひじょ 三十年』所収)。 にもたえず微かに波打ちつつあったのである(花袋 ンを発見するやその著作を英訳でよむことに没頭し、そこから著しい感化を 丸善は新渡の西洋文学をちまたに広める媒介として大きな役割をはたした。 (思想のながれ) 創作に利用するのである。十九世紀のヨーロッパ大陸の澎湃とした思 は、 日本橋丸善の二階を通して、 極東の 「丸善の二階」 一孤島 『東京の

町の古本屋で西洋人が売りとばして行った小説のなかに、 モーパッサンのいろいろな英訳本を捜すようになった。 花袋がはじめて英訳のモーパッサン短篇集をみつけたのは、 それを見いだしたのである。 国木田独歩(一八七一~一九〇八)と日光の寺院で自炊生活をしていたときである。 かれはその本によってモーパッサンの一端を知り、

うに困ったという(田山花袋「私と外国文学」)。

明治二十年代後半、

花袋蔵書の「ベラミー」を、私に貸してくれた(正宗白鳥「日本文学に及ぼしたる西洋文学の影響」『岩波講座 柳田国男(一八七五~一九六二、 それ等フランス自然派の小説を一冊 明治から昭和期にかけての民族学者 一冊と手に入れるたびに、知人の間に吹聴して、互ひに回覧したのであった。 -引用者)を訪ねると、氏は、 「君はモウパッサンを知ってゐるか」と訊いて 世界文学』 私が早稲田を卒業した時、 一所収、 昭和8・2)。 或用事で、

『ピェールとジャン』であったようだ。しかし、花袋がモーパッサンの名を初めて知ったのは、上田敏が持っていた"The Odd Number"という短 花袋が日光の古書 (洋書) 店で買ったというモーパッサン短篇集というのは、 同人の書 『東京の三十年』によると、 短篇集ではなくて長篇の

ギィ・ド・モ

は、

モーパッサ

篇集を通じてであった。 柳田国男は上田から同書を借り、こんどは花袋が柳田からそれを借り受けたのである。 柳田国男がまた貸しした「オッ

ド・ナンバー」の英訳本によって、

花袋は、

「コルシカ島」(Happiness) ··········『読売新聞』明治31・8・9『説 二兵卒』(Little soldier) ········『少年文集』明治31・4

\_散歩」(Abandoned) ······

『文藝俱楽部

明治35 1

などの作品を三篇、本邦最初の邦訳として発表した。

京都大学附属図書館の上田文庫にあるモーパッサンの作品は、つぎの二作という。

"Histoire d'une fille de ferme",『ある農家の女中の話』Paris, Ernest Flammarion, Éditeur, 1889? "Sur l'Eau"『水の上』Paris, Ollendorff, 1899

注·伊狩 章 「田山花袋とモーパッサン― - その比較研究」 『弘前大学人文社会』 第四号所収、 昭和29・4。

か、 花袋がモーパッサンの短篇を訳すとき依拠した記念すべき「オッド・ナンバー」は、 上田文庫にもなく、 現在 (昭和二十九年の時点) でその存在すら明らかでないという 柳田国男に貸したきり、そのまま手元に戻らなかったもの (伊狩章の前掲論文、二〇頁)

上 しかし、 田敏旧蔵の "The odd number" 筆者はこれと同じ版本を最近入手することができたし、『ある農家の女中の話』と同一原本を早稲田大学中央図書館において実見した。 (奇数の意) ――『モーパッサンの十三の物語』(Thirteen Tales by Guy de Maupassant, 17.8 cm 11.5 cm の訳者は、

ジョナサン・スタージス。序文はヘンリー・ジェームズによるものであり、この物語集は、 八八九年 (明治二十二年) に刊行された。同書には、 つぎの十三篇が収められている ニューヨークのハーパー・アンド・ブラザーズ社から

THE ODD NUMBER Thirteen Tales Guy de Maupassant AN INTRODUCTION HENRY JAMES

『モーパッサンの13の物語』(1889年刊)。

Ι.	HAPPINESS 3
$\amalg.$	A COWARD19
Ш.	THE WOLF39
IV.	THE NECKLESS ······53
V.	THE PIECE OF STRING ······73
VI.	LA MÈRE SAUVAGE ·····91
VII.	MOON LIGHT ······109
₩.	THE CONFESSION ·····123
IX.	ON THE JOURNEY ·····137
Χ.	THE BEGGAR ······153
XI.	A GHOST167
XII.	LITTLE SOLDIER · · · · · 185
Ш.	THE WRECK203

[筆者蔵]

という筋である。 曜日ごとにパリ郊外に遊びに出かける。そのうちに乳しぼりの娘と知りあい三角関係となる。 の草稿は前田晃(一八七九~一九六一、 原作は "Petit soldat" (「小兵士」) という。一八八五年八月 『フィ 説小 二兵卒」 一月五日稿成」とある、という(前掲伊狩論文)。 は この作品は本邦最初のモーパッサンの翻訳と考えられている。 日本紙十五枚に細かい毛筆書きであったもので、二カ月ほど筐底に秘してあったが、 小説家·翻訳家。 早大英文科卒、 ・ガロ』 のち『文章世界』 紙に掲載された。 の編集にしたがう)が所蔵している。表紙裏に 物語はブルタニュ 失恋した一兵士のほうは、 のち から徴募された二人の兵士が、 『少年文集』に発表された。 セーヌ川に投身自殺する 明 日

いまこれより花袋が訳した三つの短篇 説小 二兵卒」 「コルシカ島」 「散歩」 の訳業を検討してみることにする 説小 二兵卒」 の冒頭の 筋

はつぎのようになっている。

例であつた。先兵營の門を出ると、その鑑直ぐ右に、 小兵士は、一所に伴立つて出て行くのが、政治のも 場合による。 いつの日曜日にも、外出の許が出ると直ぐ、二人。 て居るやうに思はれる。兩手にも長い筒袖が蔽ひ冠さ何だかその身ががすつかりその軍服の中で隠れて丁つ れよりる宿一層困るのは、長いたぶ~した赤いずぼのて、一寸手を出すにる中々容易の事では無いが、そ 「人は文が低くつて身幹が小さいのに、二人は文が低くつて身幹が小さいのに、 くして歩かなけりや為らなかつた んで、これをはいて居る為め、二人は出 い驅足で驅け通つて、 說小 長いから、その恰好はまことに變てこで、 ベソッ村への大道を、てくして、世界のでして、世界のでして、世界のでして、世界のでして、世界のでして、世界のでした。 田 それからその最後の家をも 進軍の時でもあるかのやう Ш 花 てくくくとして 一來る女股を濶えていたがいずば 軍服が餘りに 袋 荒れ果 譯

で、先の大道を指すって、これは、これの方が大き、それは一く無意味なもので一そこからは、只有の体をしたこのですり、とれは一く無意味なもので一そこからは、只有がない。二人は只同じやうな事を考って、てく一くと見がない。二人は只同じやうな事を考って、てく一くと見がない。二人は只同じやうな事を考って、てく一くと見がない。二人は只同じやうな事を考って、てく一くと見がない。二人は只同じやうな事を考って、てく一くと見がない。二人は只同じやうな事を考って、てく一くと見があった。二人は大きな事を考って、てく一くと見がある。一人は大きな事を作ってある。そので、それを見出した時から、二人はいつる其態に行って、互に楽しい話を爲るやうになった。大きな事を作ってあるが、二人は比較しい話を爲るでうになった。一人が幸福を成れ、十字に爲って行途のからになるを作ってあるが、二人は叱遠には一本の大地がある。その本の大道を確かからになった。一人が幸福を表しい話を爲るでうになった。一人は大きな事を作ってあるが、二人は叱遠になった。

#### LITTLE SOLDIER.

EVERY Sunday, as soon as they were free, the two little soldiers set off.

On leaving the barracks they turned to the right; went through Courbevoie with long quick steps, as though they were on a march; then, having left the houses behind them, they followed at a calmer gait the bare and dusty high-road which leads to Bezons.

Being little and thin, they looked quite lost in their coats, which were too big and too long. The sleeves hung down over their hands, and they were much bothered by their enormous red breeches, which compelled them to walk wide. Under their stiff, high shakos their faces seemed like mere

nothings—two poor, hollow Breton faces, simple in an almost animal simplicity, and with blue eyes which were gentle and calm.

During the walk they never spoke. They went straight on, each with the same idea in his head as the other. It stood them in place of conversation; for the fact is that just inside the little wood near Les Champioux they had found a place which reminded them of their own country, and it was only there that they felt happy.

When they came under the trees where the roads from Colombes and from Chatou cross, they would take off their heavy shakos and wipe their foreheads.

and thin を訳したものであるが、「背が低く、やせていたので」の意である。花袋は coats を「軍服」と訳しているが、「外套」とすべきものであ る。「その恰好はまことに変てこで」は、花袋の創作的加筆である。 となっている。with long quick steps は「早い駈足で駈け通つて」と訳されているが、「大またの急ぎ足」とでも訳すべきか。Bezons は「ベゾ ン」となっているが、「ブゾン」とすべきであろう。「てく~~」とは、花袋の加筆部分。「丈が低くつて身体が小さい」は、原文の Being little 草稿では Courbevoie は「コルヘボイイ」という風に表記されているということだが、『少年文集』においては、どういうわけか「シンクルヒ」(エン

所は、 Their faces seemed like mere nothings を花袋は、「(その下から) 顕れて居る顔と言ったら、それは丿〜無意味なもので」と訳している。この箇 っている。この一文の意味は、「かれらの顔ときたら、これといった特徴はなかった」である。 「一寸手を出すにも中々容易の事では無いが、それよりも猶一層困るのは」も創作文。「高い帽」とは、Shako(軍帽)を訳したものである。 小日向訳(花袋訳の三年後、「一九〇一・一一、『帝国文学』誌に掲載された)によると、「彼等の顔面は、有るかなきかを疑はしめ」とな

やさしく、おだやかであった)の文を、花袋は、「そこからは、只動物の単純とでも言ふやうな単純と、やさしい穏やかな目付をした二つのブリやさしく、おだやかであった)の文を、花袋は、「そこからは、只動物の単純とでも言ふやうな単純と、やさしい穏やかな目付をした二つのブリ ほおがこけたブルターニュ人特有の顔であり、お人よしな、まるで動物のように無邪気なものであった。そして目といえば、それは青いのだが、 トン生れの顔が、うつとりとしてさも憐れ気に顕れて居る」と訳しており、だいぶ原文から逸脱した訳文になっている。 two poor, hollow Breton faces, simple in an almost animal simplicity and with blue eyes which were gentle and calm(それは二つの貧相

ばかりである」と、原意と別物にかわってしまった。 的な訳文に変わっている。すなわち、「それはレ、ジヤン村の近傍の小さな森の中で、その四辺が好くその故郷の景色に似てゐるといふので、 出させるような場所をとっくに見つけてあったので、そこにたどり着くまでは幸福を感じることはなかった)の部分は、花袋訳だと、だいぶ創作 own country, and it was only there that they felt happy. (なぜならシャンピウのそばの小さい森のちょうど入口のあたりに、かれらの故郷を思い れを見出した時から、二人はいつも其處に行って、互に楽しい話を為るやふになつたのであつた。二人が幸福を感ずるのは、 言ふと」は、 It stood them in place of conversation(それは会話の代わりになっていた)は、「同じやうな事を考へて」と意訳した。「その志す所は何処かと 創作的加筆。for the fact is that just inside the little wood near Les Champioux they had found a place which reminded them of their その森の中に居る時

「で、先に大道を猶少し歩いて行くと」は、創作的加筆。Colombes は、「コロンボエ」、Chatou は「レルテルケ」と表記されている。 「其處に一本の大樹が凉しい蔭を作つてゐるが、二人は此處に来ると、いつも言合せたやうに立留つて」は、 二兵卒」は完訳であるが、もう一つ巻末の一節を引いて吟味してみよう。 花袋の創作的加筆

た。かと思ふと、その友の頭が、ちよつと川の面に見出ない。すると、その女の頭が、ちよつと川の面に見出ない。すると、その少し下流に、ふと何物か浮な出する。マックはあまりの事に驚いて、明はうとしたが、愛が

Luc, his throat paralyzed with anguish, tried in vain to shout. Farther down he saw something stir; then the head of his comrade rose to the surface of the river and re-entered it as soon.

Farther still he again perceived a hand, a single hand which issued from the stream and then plunged back. That was all.

The barge-men who ran up did not find the body that day.

Luc returned alone to the barracks, running, his head filled with madness; and he told of the accident, with tears in his eyes and voice, blowing his nose again and again: "He leaned over . . . he . . . he leaned over ... so far ... so far that his head turned a somersault; and ... and ... so he fell ... he fell....'

He was strangled by emotion, he could say no more. If he had only known!

その珍事を人々に話したが、泣かずにそれを話す事がして、丸で狂せんばかりの有様であつた。で、かれはラックは一人で走つて長巻に無いった。かれの脳は錯亂

かれは涙と鼻とをすいりながらいかう

思ふと、それも又沈んで丁つた。
に、ふと手が・・・・・・ 僅かに少しばかり手が・・・・・かと
て、我を忘れて、じつと見てゐると、又その少し下流

えて、そして又すぐ沈んで見えなくなつた。はつとし

barge-men who ran up did not find は フランス語音では、 「リュック」と表記すべきものであろう。 (駆けつけた船頭らは) は、 花袋訳だと「探しに出た船頭」となっている。 「はっとして、 我を忘れて、じつと見てゐると」は、 創作的加筆。

てしきり鼻をかんだ)は、 he told of the accident, with tears in his eyes and voice, blowing his nose again and again(目に涙をため、 「かれはその珍事を人々に話したが、泣かずにそれを話す事が出来なかった」と意訳されている。 涙声でこの事件について語った。 「かれは涙と鼻とを そし

だし…やつは…身をのりだし…のりだしすぎて…頭からとんぼがえりをして…で…で…ドボンと落ちてしまった…)の箇所は、 He leaned over ··· he ··· he leaned over ··· so far ··· うりながら」の個所も意訳である。 so far that his head turned somersault; and ··· and ··· so he fell ··· he fell : 花袋訳によると、 (やつは身をの 160 (11)

#### HAPPINESS.

IT was tea-time before the appearance of the lamps. The villa commanded the sea; the sun, which had disappeared, had left the sky all rosy from his passing-rubbed, as it were, with gold-dust; and the Mediterranean, without a ripple, without a shudder, smooth, still shining under the dying day, seemed like a huge and polished metal plate.

Far off to the right the jagged mountains outlined their black profile on the paled purple of the west.

We talked of love, we discussed that old subject, we said again the things which we had said already very often. The sweet melancholy of the twilight made our words slower, caused a tenderness to waver in our souls; and that word, "love," which came back ceaselessly, now pronounced by a strong man's voice, now uttered by the frail-toned voice of a woman, seemed to fill the little salon, to flutter there like a bird, to hover there like a spirit.

Can one remain in love for several years in succession?

"Yes," maintained some.

"No," affirmed others.

We distinguished cases, we established limitations, we cited examples; and all, men and women, filled with rising and troubling memories, which they could not quote, and which mounted to their lips, seemed moved, and talked of that common, that sovereign thing, the tender and mysterious union of two beings, with a profound emotion and an ardent interest.

ためにコルシカ島に駈け落ちし、 'コルシカ島' の原文の冒頭は、 そこで仲よくしあわせな生涯を送ったという話 つぎのようなものである

この作品は 八八四年三月に『ゴロワ』紙に発表された。英訳の表題は、"Happiness"となっている。 将軍の令嬢が下士官と恋に陥り、

花袋は、

「オッド・ナンバー」

の中から、

モーパ

ッサンの短篇をもう一つ訳した。

「コルシカ島」

である。

原作は "Le Bonheur"

(「幸.

れが真相を知ったならば……!」といった意である。が、 花袋はHe was strangled by emotionの箇所を訳さなかった。

かう凭り掛つて…かういふ風にして…それでも止めずに 、りを打つて……落ちて了つたんだ……落ちて了つたんだ……」となっている。この訳は必ずしも悪くはない He was strangled by emotion, he could say no more. If he had only known! は、「かれは感きわまって、もうそれ以上口がきけなかった。 (創作的加筆)、まだ~~頭を先に深く~~凭りかゝつて行つて……そして不意に筋

斗ぼ か

もし



田山 花袋譯

では、からなもなく、 香然ともたりと襲ひ來て、 そ何處よりともおく、 香然ともたりと襲ひ來て、 それとおく語る言葉と経かおらしめ、 それとおく無視のやさしさと互の順に取はしめぬ。かくて「戀」といへる言葉と、 がといって「夢」、 いまれの 難に 終記されて、 此處 に鳥の飛 なが如こしる女の難に 終退されて、 此處 に鳥の飛 なが如こしる女の難に 終退されて、 此處 に鳥の飛 なが如こしる女の難に 終退されて、 此處 に鳥の飛 なが如こし、 彼廊に覗の逍遙ふごとく超之をその一室の中に、 滿ちたり含っ

どや)と訳しているが、やはり「別荘」の語を当てるべきであろう。副詞の commanded the sea のはない。 火ともし前」 この句につづく訳文は、必ずしも悪くはないが、 は、 は、 家庭におけるランプなのか、 「別荘から海がみえた」とでも訳せるが、 それとも街灯なのかはっきりしない。 花袋は 花袋は原文を句切ることなく臭のながい文にして訳している。 「旅館は恰も大海に臨みて」と訳している。 「恰も」は不要である。 「晩餐果てて後」 は、 創作的加筆であり、 かれまたVillaを 原文に該当する "旅館" The villa

訳では「その旧き問題を論じ」となっている。oldは「昔ながら」もしくは「昔からある」の意である。 We talked of love は「われ等は互に恋を語り」ではなく、「恋について語った」と訳すべき所であろう。We discussed that old subject は、 花袋

と他の一人は、断定したるやうにいふ」と訳されている。 はここでは、つぎの行のothersと対照的に用いられている。"No", affirmed others(「それはむずかしい」と、きっぱりいう者もいる)は、「『否』 "Yes", maintain some の箇所は、「『然り』と一人はいふ」と訳されている。Some は「一人」でなく、「……する人もいる」の意である。some

union of two beings, with a profound emotion and an ardent interest. この英文は、「わたしたちはいろいろな場合を区別し、いろいろな限界をきめ、 they could not quote, and which mounted to their lips, seemed moved, and talked of that common, that sovereign thing, the tender and mysterious 興味をしめした。」とでも訳せる。 またいろいろな例を引いた。そして、その場にいる者は皆――男も女も、さまざまな悩ましい想い出がよみがえり、それを引き合いに出せずにい た。だれもが感動したようであり、男女を結びつけているありふれた、最高の恋、やさしくて、神秘的な結びつきについて語り、深い感動と熱い We distinguished cases, we established limitations, we cited examples; and all, men and women, filled with rising and troubling memories, which

……に」までは意訳されている。union of two beings は、「両性の一致」と訳されているが、すっきりしない訳である。 and all, を花袋は、「満座の人」と訳しているが、これはうまい訳である。しかし、「男も女も皆互に経験したる適例を思出して、……そを敢て つぎに巻末の一節をひく。

1(袋)

いっかの女があまり容易く満足さるべき脚と、あまり終りて、老神士の默しなっ不意に「人の女の語り終りて、老神士の默しなっ不意に「人の女の語り終りて、老神士の默しなっ不意に「人の女の語り終りて、老神士の默しなって意味もは、また。

したるが為めのみ。恐らくかの女の愚かなるものりに幼稚かる要求とあまりに軍権をある所望とて有りに対称する。 またり

The story-teller was silent. A woman said:

"All the same, she had ideals which were too easily satisfied, needs which were too primitive, requirements which were too simple. She could only have been a fool."

Another said, in a low, slow voice, "What matter! she was happy."

And down there at the end of the horizon, Corsica was sinking into the night, returning gently into the sea, blotting out her great shadow, which had appeared as if in person to tell the story of those two humble lovers who were sheltered by her coasts.

「されぞその何ぞ關すべる。少くともかの女の幸なれた答へしい、低く優しさある他の難ありる。

嗣ありしるのと。」

にてありしからんで

求も単純すぎますわ。それではばかな女だというほかありません」とでも訳せそうだが、この部分の花袋訳は自由訳にちかい。 requirements which were too simple. She could only have been a fool. は、「それにしても、 What matter! She was happy (ばか呼ばわりされても平気です。彼女はしあわせだったのですから) は、 「不意に」は、ことばのあやとして添えたものか。 All the same, she had ideals which were too easily satisfied, needs which were too primitive, 彼女の理想はけっして高いものではありませんね。 花袋訳だと、「されどそは何ぞ関すべき。

このさいごの一筋は、 頭から訳さず、うしろからひっくり返って訳している。苦しい訳法である。 coasts(この島にかくまわれた二人のつつましやかな恋人)は、「この海岸に隠れたる二人の恋人」と訳されている。

いささか意味がよく通らない。

those two humble lovers who were sheltered by her

少なくともかの女は幸福なりしものを」と訳されていて、

物語は不義の子をもつ老婦人が、約四十年ぶりに老友とともに里子に出した息子に会いに行くが、マルセーユにいるその者ががさつな牛乳屋にな 花袋が訳したモーパッサン物のさいごは、 「散歩」(Abandoned「捨てた子」)である。この作品は、 八八四年八月 『フィガ 紙に掲載された。

156 (15)

っているのを知り、あいそがつき逃げ帰ってくる話。

花袋が「散歩」を訳すとき利用したのは、五十銭本の After-dinner Series (「食後シリーズ」) というひじょうに粗末な版本のうちの一冊であって袋が「散歩」を訳すとき利用したのは、五十銭本の After-dinner Series かれはこのシリーズ本を丸善の二階に備えてある書目(カタログ)のなかで見つけ、歓喜するのである。そして直ちに注文した。

篇集』が十冊か十二冊、安いセリースで出版されてあるのを発見した。何とも言われず嬉しかった。私は金のことなどを考えずにすぐ註文した。 ある日、私は丸善の二階へ行った。そしていつものように、そこに備えられた大きな目次の書を借りてそれを翻していた。ふと、モウパッサンの『短

注・『東京の三十年』。

そしてこの版本が日本に到着したのは、 明治三十六年(一九〇三)の五月十日ごろ(花袋の記憶ちがい、 じっさいは明治三十四年六月ごろ)の

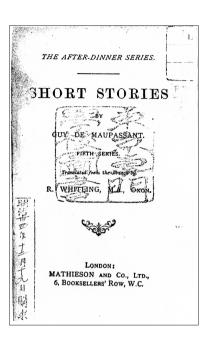
ことという

丸善へむかった(前田晃「花袋氏と読書」『明治大正の文学人』所収、 金を払う金がなかった。そこで出版部長の内山正如に泣きつき、『美文作法』を書く金 当時、花袋は博文館で雑誌『太平洋』を編輯していた。丸善から電話でそれを知らされると、もういても立ってもいられなかった。 日本図書センター、 (印税) のなかから十円前借して、降りしきる雨をついて 昭和58・4)。 が、その代

ということが、堪らなく私を得意がらせた。私は撫でたりさすったりした(田山花袋作『東京の三十年』)。 安いセリースで、汚い本であったけれど、それがどんなに私を喜ばしたであろう。ことに、この十二冊の『短篇集』の日本での最初の読者であり得る

という。また扉に「花袋」といった蔵書印が押してある、この英訳短篇集三冊を大事にしているのは、 ではない。が、現在早稲田大学中央図書館に十一冊 たものであるが、花袋は明治四十年(一九〇七)ごろ十七巻の全集を入手したものらしい。この十七巻本は、遺嗣子・田山瑞穂氏が所蔵している 花袋がモーパッサンの短篇全集のやすい叢書を見つけ、 (第一巻のみ欠) 架蔵されている。 同シリーズのモーパッサンの英訳短篇集は、 逐次刊行され 有頂天になった「食後シリーズ」の版本十二冊は、こんにちそれを入手することは容易(5) 元博文館で花袋の同僚であった前田晃であ

「散歩」の原文の冒頭と花袋訳は、つぎのようなものである。



	NTEN	TS.			
	<b>-</b> ;o:-				
MAD					2
AN UNFORTUNATE I	IKENE	99		•••	100
THE NEW SENSATIO				•••	45
THE VIATICUM		•••	•••	•••	49
THE RELICS	***	•••	•••	•••	55
THE THIEF	•••	•••	•••	•••	61
	•••	•••	•••	•••	68
A RUPTURE	•••		***	•••	75
A USEFUL HOUSE	•••				79
THE ACCENT					84
GHOSTS	•••		•••		90
CRASH					98
AN HONEST IDEAL					102
STABLE PERFUME					110
THE ILL-OMENED G				•••	1
AN EXOTIC PRINCE				•••	115
VIRTUE IN THE BALI		•••	•••	•••	123
			•••	•••	130
IN HIS SWEETHEART	'S LIV	ERY	•••	•••	137
DELILA	•••	•••	•••	•••	145
A MESALLIANCE	•••			•••	153
BERTHA					163
ABANDONED					176

九日に同書を購求している。この五巻には、 「散歩」の原書 "Abandoned" が収録されているのは第五巻である。東京専門学校 短篇が二十一篇が入っている。Abandoned (「捨て子」) はいちばん最後に収録されている。 (早稲田大学図書館) は、 明治三十四年 (一九〇一) 十二月十

#### ABANDONED.

for really think you must be mad, my dear, to go for a country walk in such weather as this. You have had some very strange ideas for the last two months. You take me to the sea side in spite of myself, when you have never once had such a whim, during all the forty four years that we have been married. You chose Fecamp, which is a very dull town, without consulting me, in the matter, and now you are seized with such a rage for walking, you who hardly ever stir out on foot,

that you want to go into the country on the hot-test day in the year. Ask d'Apreval to go with you, as he is ready to gratify all your fancies. As for me, I am going back to have a nap." Madame de Cadour turned to her old friend and

"Will

"Will you come with me, Monsieur d'Apreval?"

He bowed with a smile, and with all the

gallantry of bygone years:—
"I will go wherever you go," he replied.
"Very well then, go and get a sun-stroke,"
Monsieur de Cadour said; and he went back to
the Hôtel des Bains, to lie down on his bed for an

hour or two.



ŧ 田 ゥ Ш 18 ッ 花 サ 作

て、そして言つた。

カドーコル夫人は傍なる昔馴染の老いたる友の力に振返つ私は其間に宿でもお前の望み通りに貧て果れるから……っれば、またものでもな前の望み通りに貧て果れるから……っれば、いるとはない。 氣の沙汰とは思はれん。けれを鄧つて行からと言ふのなら、

夢に耽るべく、燥ねて宿して居る「オーテル、デ、パン」の方\*\*\* そして少時すると、渠は一二時間臥床の上に横つて、午睡の 果は微笑を含んだまし、點頭くやうに頭を少し下げたが、光 へと歸つて行くのであつた。 ドエ カドーユルは言ったo と答った。 を其体度に顕しながら、 い用はさぞ美男子であつたらうと思けれる名残のうるけしさ 「グフルブアルさん、行つて下いるか」 『ろれちゃ、行って程間にでもなって水るちゃ』とモッシェ、 『貴女の行けと仰しゃる處なら、 何處へても……」

と思はれる名残のうるはしきを其体度に顕しながら」 ている。 d'Apreval and get sun-stroke は、 With all the gallantry of bygone years は、「むかし風のいんぎんさで」とでも訳せそうだが、花袋は (ダプルヴァル) 「太陽の直射光線を浴びに行く」ほどの意だが、花袋は sun-stroke (日射病) は、 「ダブルブァル」と表記されている。 と訳しているが、これは翻案もしくは自由訳にちか Madame de Cadour (ド・カドゥ ] を ル夫人) 電影 「若い時はさぞ美男子であつたらう は、 (日射病の意) といった古風 一カドー ユル夫人」

such a whim 創作的加筆

(お前はそんな気まぐれを一度もおこしたことがなかった) は、

「無理に海岸へ遣つて来たのさへ」と訳されている。「遣る」は、

ぱり出して)

は、

「私が達つて留めるのも聞かずに」

は、

創作的

加筆。

You take me to the seaside in spite of myself (いやだといっているのに、

「……の珍しい事ぢやのに」と意訳されている。

「此んなな

田舎の」

は

本来「行かせる」の意である。you have never once had

わたしを海岸へひ

(18) 153

つぎに巻末の一節をひく。

花袋訳

They returned slowly, without speaking a word. She was still crying; the tears ran down her cheeks continually for a time, but by degrees they stopped, and they went back to Fécamp, where they found Monsieur de Cadour waiting dinner for them, and as soon as he saw them, he

"So my wife has had a sun-stroke, and I am very glad of it. I really think she has lost her head for some time past!"

Neither of them replied, and when the husband asked them rubbing his hands:—

"Well, I hope that at least you have had a pleasant walk?

Monsieur d'Apreval replied:—
"A delightful walk, I assure you; perfectly delightful."

#### THE END.

から を訊ねると、ダフルブアルはおも手持無沙汰らしく、狐狐した。 「うれて一体何うちゃつた!些とは面白かつたかな?」 と妻に向って言ったっ れんちゃ。二三月前へらお前はもう除程何うかして居るちゃれんちゃ。二三月前へらお前はなう除程何うかして居めにても取付かれて來たか…ろれも結構かも知『何うじゃ程為にてもなりない。 するとろれる全く收つた様子でフェカンの町近く來る頃には 沢は一しきりろの阿類を瀧のごとく伴へ落ちた。けれて少時になった。 できなかつた。渠女は銜絶えず歩きながら欹戯けて居るのできな。 Lytich character was the control of the control 二人は徐かに随路に歌いたか、 カドーユルは手を摩りながら、循押返して、 けれど二人はそれに答へやうとも為なかつた。 中々而白い散步でした。本當に、ろれて、中々面白くなんのない。 モツシュ、ド、

「さも手持無沙汰らしく、狼狽して」は、 (しばらくまえから) 瀧き のごとく」は、 は、 誇張的な加筆部分。 「二三月前から」と訳されている。 創作的加筆。A delightful walk, I assure you; perfectly delightful は、「たしかに、たのしい散歩でした。 「もう其涙の痕をその両頰に認める事も出来なくなつたのである」 一猶押返して」 は創作的加筆。 この語の意味は、 は、 相手のことばを押しのける、である。 創作 的 加筆。 for some time past

(終

申し分のないものでした」とでも訳せそうだが、花袋はこの一文を「ほんとうに中々面白い散歩でした。本当に、それァ、中々面白く……」 している

あり、 床のなかでもモーパッサンをよむことに没頭した。 花袋は「食後シリーズ」のモーパッサンの短篇集を入手後、博文館に通うとき、 岡山のひと近松秋江(一八七六~一九四四、明治・大正期の小説家・評論家、 紫のメリンス(やわらかく織った毛織物)に本を二、三冊包んで歩いている「無骨な大男」とときどき会った。目つきは人を圧迫するようで 人相もあまりよくなかった。その大男は、だれであろう、 モーパッサンを発見したのち、 喜久井町から本町の博文館にかよう、 東京専門学校卒)は、通学の毎朝九時ごろ、 それをポケットに入れて行った。編輯の余暇に、 かれの思想と眼と肉体は、この十二冊の 田山花袋その人であった。 『短篇集』にすっかり 田舎銘仙の羽織を 車の上でも、

『英語青年』第六三巻第六号[昭和5・6]は、花袋の死を報じた。いわく――

打たれた。

ある。 昭和五年 (一九三〇) 五月十三日午後四時ごろ -田山花袋は咽喉癌により逝った。享年六十歳であった。氏はキーツ詩集の訳を出したが今は絶版で

花袋は、 倶楽部』 この訳詩集は、 のち開業医の免許をうるが詩人に転向)の詩を二三篇訳した。それは隆文館発行の訳詩叢書のうちの一冊『キーツの詩』 『英語青年』の「片々録」が、一文学者の死を伝えるのは珍しいが、花袋がキーツの詩集を刊行したからであろう。自然主義を代表する作家の や『新潮』 モーパッサンの短篇を三篇訳した以外に、イギリスのロマン派第二期の詩人、ジョン・キーツ(一七九五~一八二一、馬丁の子に生まれ、 上田敏の『海潮音』が刊行された年と期をおなじくしている。またこの訳詩集は、『花袋全集』に収録されていない。 0) 「新刊紹介」に、 花袋訳『キーツ詩集』は取りあげられた。前者に掲載されたものは、 左記のようなものである。 [明治38・10] である。

文館發兌、定價金五拾錢)

▼1 ツの詩♥ 詩人キーツ氏に私淑でる田山花袋氏が、其詩集中の粋を抜きて、せる田山花袋氏が、其詩集中の粋を抜きて、せる田山花袋氏が、其詩集中の粋を抜きて、

注・『文藝倶楽部』(第一一巻第一五号所収の「評林」、明治3・11)。

後者は、『新潮』(明治38・11)の「新刊紹介」に、

キィッの詩

**耐田山花袋**譯

と スの大詩人だという。 このような好意的な批評とは反対に、 紹介されたものである。 いまその訳詩集を読んでみたところ、 紹介記事をかいた記者によると、キーツは例の晦渋なる「エンデミオン」をもって天下幾多の読者を困らせたイギリ 皮肉に満ちた批評も現れた。 調べは荘重であり、 それをいまのやさしい言葉に直していうと、つぎのようになる。 適切な辞句を選んだ苦労の跡がみとめられるという。

あ に人をびっくりさせるものである。 田 キーツは亡くなったのちも、 山花袋氏が訳した『キイツの詩』 日本人から虐遇 この書の広告にあるように、 を、 甥がさっそく一冊もとめたので、 (むごい扱い) 花袋氏がキーツの詩を多年心読されたこと、 をうけるとは気の毒なことである。 拾い読みしたところ、 どこの国の語法で訳したものかとおもった。 · 『ラ、 ベム ル。 誠に奥ゆかしくおもいます。 ダ△ ム,△ サンの恵』 のeset の文字などは、 なんとま

注・『明星』(第一一号所収、明治38・1)。

またつぎに引く、 茅野蕭々(一八八三~一九四六、歌人・詩人・ドイツ文学者、キのしょうじょう 慶応義塾大学、 日本女子大学教授) の講評になると、 みそく

#### DAISY'S SONG

1

The Sun, with his great eye,
Sees not so much as I;
And the moon, all silver-proud,
Might as well be in a cloud.

2

And O the spring — the spring I lead the life of a King!

Couch'd in the teeming grass,

I spy each pretty lass.

3

I look where no one dares,
And I stare where no one stares,
And when the night is night,
Lambs bleat my lullaby.

\*The Poemes of John Keats
Edited with an introduction
and notes by E.de Sélincourt,
Methuen and Co., London, 1905,
p.260より引用。

られよ。 珍しい。 誤値≥い△ そして本書を絶版にするべきである。 (中略) えば全篇みな誤植である。 本書を通読してみたところでは、 誤訳といえば全篇みな誤訳である。 花袋氏は英語を知ってはいない。 東京で刊行される出版物のなかで、このように無能有害なるものはひじょうに (中略) あえて直言させていただくと、『キーツの詩』全篇を再訳せ 注 • 『明星』 (第 1 二号、 明治 38 12

さいのかれの訳しぶりを検証する必要がある

はたして花袋の『キイツの詩』

は

すべて誤訳であったのか。

かれは英語を知っ

てはいなかったのかどうか。

これらの疑問に答えるには、

たとえば、「ヒナギクの歌」

(Daisy's Song)

から一部引いて、

花袋の訳技をみてみよう。

野菊の歌へる

しかすがに見えず我が如、 天津日、其眼は輝く、 しかすがに雲こそ懸れ。 月、しろがね、照るや誇燿

繁る草葉絶間よりぞ、 帝王の世も如かめやも あゝ春 つね見るや、はしき少女子 ――さなり春や、

聞くや、羊の睡眠歌 世の見得ぬものをも見る あゝかくて夜の近づき 人知らぬものを知り、

 $\equiv$ 

が」(春日)は、大和国春日部郷(いまの奈良の中心)の意である。I lead the life of a King は「わたしは王様ぐらしをしている」の意であるが、 お月さまは、 花袋は The Sun を「太陽」とは訳さず、「天津日」といった古語を用いた。And the moon, all silver-proud, might as well be in a cloud(そして 銀色の輝きを誇ったところで、雲がかかっているも同じ)の意である。「誇燿」は漢語であり、「誇りかがやかす」意である。「かす

花袋は としても、 この四行詩をちょっと読んだだけでも、すぐ意味を取るのが容易ではない。やや解りにくい訳文である。古語や漢語を用い、雅文体で訳されて 「帝王の世も如めやも」と、やゝ誇張的に訳している。 couch'd (横たわって)の語は抜けている。prettyを「はしき」と訳しているが、これは「いとしい」意で用いたものである。 「絶間」とは 「切れ間」 の意か。teeming grass の訳としては、「繁る草葉」 はよい

いるが、

かならずしも悪訳ではない。

び 味不明な箇所や誤訳や稚拙な訳がみられるという(秋山勇造『翻訳の地平 花袋は栃木の館林の人である。 しかし、「ラ、ベル、ダム、サンの恵」(La Belle Dame Sans Merci)や 明治二十年(十七歳)ごろ、野島金八郎 田山家は小祿ながら代々秋元藩士であった。兄弟は多いうえに家は貧しかった。 (大学予備門生)から英語の手ほどきをうけ、 「希臘古瓶賦」 ―翻訳者としての明治の作家』翰林書房、平成七年一一月)。 (Ode on a Grecian Urn) の訳文において、 翌年神田仲猿楽町の「日本英学館」で英語を学んだ。 少年のころ漢学塾で漢詩文を学 少なからず意

きた。 養や和歌にかけては相当なものであったと思われる。外国語としては、英語のほかにドイツ語を学んだようであるが、これは独学であったのであ ろう。花袋はじゅうぶんな学こそなかったかもしれないが、ひじょうに豊かな天分に恵まれていた。だからかれは文苑において成功することがで 同二十三年(一八九〇)九月、日本法律学校 人間は学問がよくでき、有名な学校を出たところで高が知れているのである。その道で一家をなすには、努力と天分と運に負うところが少くな (いまの日本大学) に入るが、数ヵ月で退学した。 学歴らしいものは、とくになかったが、 国漢の素

(1 学校秀才が必ずしも大成するとは限らない。 学問だけに限らず、芸術や文学においては、天分のないものはとうてい成功することができない。

\*

#### 上田 斑ズ

英訳本によらず、フランス語から直かに訳したように思える。つぎの三点がそれである。 き た上田敏(一八七四~一九一六、評論家・外国文学者・詩人、京都帝大教授)であった。『海潮音』は独特なことばの響きと詩美において群を抜(25) 文学の研究にしたがう者は、「細心精緻の学風」を堅持するよう説いたのは、 他の訳詩集と比侔できぬものであった。 ヨーロッパ文学の紹介と移植につとめた敏もまた、 訳詩集 『海潮音』(本郷書院、 モーパッサンの短篇の翻訳に手を染めている。 明治38・10)をもって人心を風びし が、



されている。 「文反古」には訳者名がないが、 「かたおもひ」(La Rempailleuse「椅子わら詰替への女」)……『藝苑』明治3・2 しかし、訳文はけっして読りやすくない。 上田敏が訳筆をとったことはたしかである。これは一種の雅文 (優雅な文章) といおうか、かれ流の美文で訳

ぎが客間の中に飛びこんできた。そのとき主人公は急いで立ちあがり、 の名 "みをつくし" (敏のペンネーム) が付いている。物語は親友の妻 (魅力のある老婦人) に客間において誘惑されかかったとき、 ら女性がしたためた四通の手紙が出てきたという話。それらは僧院長宛のラブレターでもあるが、その一通には寝床について書かれていた。寝台 「ゐろり火」は、「文反古」と同様、 ぬれ場をとり押えられずにすんだ。男はきわどいところを助かったので、その後独身を通したという話。 人生の縮図、 人が生まれ、愛し、死ぬのもみんな寝台だという。 敏の随筆および訳文集である『みをつくし』(文友館、 物語は競売で手に入れた祭服を小さなイスに張りたいと思って、裏地を裂いたら、 即座にそのたきぎを暖炉の中へもどした。ちょうどそのとき夫が帰ってき 明治34・12)に収載された。「ゐろり火」には、 暖炉のたき



明治40年 (1907) シカゴで撮った 写真。敏 (35歳)。『上田敏全集』 (改造社、昭和6・7) より。

« Mon ami, je suis malade, toute souffrante, et je ne quitte pas mon lit. La pluie bat mes vitres, et je reste chaudement, mollement rêveuse, dans la tiédeur des duvets. J'ai un livre, un livre que j'aime et qui me semble fait avec un peu de moi.

Vous dirai-jelequel? Non. Vous me gronderiez. Puis, quand j'ai lu, je songe, et je veux vous dire a quoi.

« On a mis derrière ma tête des oreillers qui me tiennent assise, et je vous écris sur ce mignon pupitre que j'ai reçu de vous.

« Étant depuis trois jours en mon lit, c'est à mon lit que je pense, et même dans le sommeil j'y médite encore.

«Le lit, mon ami, c'est toute notre vie. C'est là qu'on naît, c'est là qu'on aime, c'est là qu'on meurt.

« Si j'avais la plume de M. de Crébillon, j'écrirais l'histoire d'un lit. Et que d'aventures émouvantes, terribles, aussi que d'aventures gracieuses, aussi que d'autres attendrissantes! Que d'enseignements n'en pourrait-on pas tirer, et de moralités pour tout le monde!

Guy de maupassant; *Madamoiselle Fifi*, illustrations de L. Vallet, Albin Michel, 1940 より。

は 「文反古」の原文の 冒 頭 を 远 節 ほど省 略 訳さず、 第 Ŧī. 節あたり から訳している。 つぎに引く原文がそれである

ない男であった。

一敏訳



## 文反古

すこしつけまみらせむ。こえあぐべきかいなしかり給はむももそろしよみはてくまた思ひ沈みぬさればりてうつら 〈一夢見くらし侍りがもとのふみも身にひきあてくをかしく其名きりてうつら 〈一夢見くらし侍りがもとのふみも身にひきあてくをかしく其名きていちなやましう床はなれがたく窓には時雨毛灌園のあたくかきに熱すこしあ

Ŕ

枕か

はせ、超きなほりて、いつぞや給

Û,

し小机を臺にて此文かきま

ゐ

ぬるおそろしのことえんなること又心動すこと幾何ぞ何れの誠かこゝよりひきわれにどくれびどんぬしの筆あらば床のはなしといふものかゝまほしや驚かれ君よげに床こそ人の一生なれ生るゝもこゝ懸ふるもこゝ死ぬるもまたこゝなり。ほこれを思ひ侍り。

v

た

しえざらむ。衆生の数こくに籠れり。

ぬくぬくと、ゆったりと夢想にふけっております)は、 これは意訳である 「こゝちなやましう」は、 創作的加筆。je reste chaudement, mollement rêveuse, dans la tiédeur des duvets(わたしは綿毛のぬくもりの中で、 「毛蒲團のあたゝかきに、熱すこしありて、うつら~~夢見くらし侍り」と訳されている。

songe, et je veux vous dire à quoi(わたしは書物を一冊もっております。大好な書物です。その本にわたしのことが少し書かれているようです。 げます) は、 どんな本にですって?いいえ、教えられません。おしかりを受けますから。読んでしまったら、考えてみましょう。何を考えるか、教えてさしあ J'ai un livre, un livre que j'aime et qui me semble fait avec un peu de moi. Vous dirai-je lequel? Non, Vous me gronderiez. Puis, quand j'ai lu, je 敏訳だと「枕もとのふみ(書物--引用者)も、身にひきあててをかしく(我が身に押しあてるのもこっけい――引用者)、其名\*\*\*

かいつけむひま」とは、 「お知らせするひま」の意。 et puis (おまけに) は、 訳されていない。 vous le pourrai-je montrer(よくなった証拠を

しつけまゐらせむ(少しだけ教えて差しあげましょう--引用者)きこえあぐべきか(申し上げるべきか― ――引用者)」となっている。 —引用者)。いな。 しかり給はむもおそろし。よみはてゝまた思ひ沈みぬ。 さればすこ

des oreillers qui me tiennent assise (頭のうしろに枕を入れてもらったので、体をおこしていられる) は、「えり (えり首-起きなほりて」と訳されているが、これはとくに問題はない。「くれぴよんぬしの筆あらば、床のはなしといふものかゝまほしや」は、クレピヨ ンさんほどの筆力がわたしにあったなら、寝台の話を書きますものを、の意である。「……幾何ぞ」は、「どれほど……するか」の意である。 「枕もと…」「身をひきあてゝ」は、原文にないことばを補ったものである。訳文は原文から大きくそれてはいない。On a mis derrière ma tête -引用者)に枕かはせ、

んの教訓が得られる)は、 d'autres attendrissantes 「何れの誠 (その他ほろりとさせるもの) (真理 引用者) かこゝよりひきいだしえざらむ」と訳されている。 は、 訳されていない。 Que d'enseignements n'en pourrait-on pas tirer (そこからたくさ

つぎに巻末の一節をひく。

[敏訳]

しっつ z 眀 思 5 日 ď. *t*)≥ ば、さらば、わか しことな  $\equiv$ 溡 n たれば 尋 ね給へ Œ 枕 Z はあ 君。くちづけしたまふ為にこの手さしのべたり。また此唇をこそ カコ はずして し、病 n どか \$ ح あ た Œ v りて 0 ş, け 答 君 ľζ Ł ع 办 ひまもなく、又すべて思ひ 御 L 見 ね る 弘 ح ع らむとこ カン な は そ 思ひ 侍 浮 ぶる 'n Š 弘 ク

« Que d'autres choses me sont encore venues! mais je n'ai le temps de vous les marquer, et puis

me les rappellerais-je toutes ? et puis je suis déjà tant fatiguée que je vais retirer mes oreillers, m'étendre tout au long et dormir quelque peu. « Venez me voir demain à trois heures ; peutêtre serai-je mieux et vous le pourrai-je montrer. « Adieu, mon ami ; voici mes mains pour que

vous les baisiez, et je vous tends aussi mes lèvres. »

V

228

はがり

(もちばんさん作

LA BUCHE

Le salon était petit, tout enveloppé de tentures épaisses, et discrètement odorant. Dans une cheminée large, un grand feu flambait ; tandis qu'une seule lampe posée sur le coin de la cheminée versait une lumière molle, ombrée par un abat-jour d'ancienne dentelle, sur les de ux personnes qui causaient.

Elle, la maîtresse de la maison, une vieille à cheveux blancs, mais une de ces vieilles adorables dont la peau sans rides est lisse comme un fin papier et parfumée, tout imprégnée de parfums, pénétrée jusqu'à la chair vive par les essences fines dont elle se baigne, depuis si longtemps, l'épiderme : une vieille qui sent, quand on lui baise la main, l'odeur légère qui vous saute à l'odorat lorsqu'on ouvre une boîte de poudre d'iris florentine.

の原文の冒頭は、 つぎのようなものである

文反古」 につづいて発表になった「ゐろり火」 は 前作ほど読みづらくはないにしても、 原文の解釈や訳文にいろいろ欠陥がみとめら 創作文のそれである。だからモーパッサンの味わいは読者には伝わらない。「文反古」は完訳ではなく縮訳である。

およそ原文に沿って訳してあるので、大きなあやまちはない。

たような印象をあたえる

\*

おみせできる)

は、

訳されていない。「病おこたりて君と御見ることかなはむ」

は、

創作的

加筆。

「いざとはがりに」は意味不明である

訳文全体からうける印象は、

モーパッサンの翻訳というより、

作品全体を三分の一ほど縮

この最後の一

節は、

敏訳 詞 禁 轉 載

< 廣 叁 暖 爐 K は 火 V み ع 機に、爐 を 0 額 < 0 す

化 る 粧 じ 染 0 み 女 は、髪 な る 白 カン 入 叁 જ \$ 5 し そ な 天 0 色 指 IC 0 昔 < 忍 ち グ は H る なさ 7 皺 ば な ふろれんし き 肌 0 薄 葉 P め 「菖蒲 5 た Ø る 粉 K 车 £ ゔ ろ

葢 な カ>

V 0 あ を Ž. か

0

あ

み

る

を

りやすら

煕

4

な 9

燈 窓

火 掛

Иį 0

な 容

Ż 閒

る 0

n K

7-

0 W

カン カン

z L

0

影

ょ

柔

Š

光

を

落

L

ż

蕭

P

カ>

K

語 る二人

み

K

す

ŧ る

香 な

(I Ź

Ś

る

ろ

り火

142 (29)

papier を訳したものである。 |燈火はなえたる(くたびれた| . 老婦人のひとり)は、「天色の昔忍はると(天性の美人をなつかしむ意 tentures は、ここでは 「暖炉」もしくは「マントルピース」とでも訳すところである。un abat-jour d'ancienne dentelle(古風なレー 「壁布」の意であるが、 |引用者) れえすのかさ」と訳されている。 敏は 「窓掛」(カーテンのこと)と訳している。cheminéeの訳 「蕭やかに」は創作的 -引用者)」と意訳されている。 加筆。 une 「薄葉」 de ces vieilles adorables (すばら ス飾りのついたランプの笠) 「爐箔」 (うすい紙の意) はわかりにくい。 は m まな は

l'épiderme: une vieille qui sent (よい香りがした。 それを長年はだ洗いに使っていたのだ)の の根茎からつくる芳香剤」) et parfumée, tout imprégnée de parfums, pénétrée jusqu'à la chair vive par les essences fines dont elle se baigne, depuis si longtemps つぎに巻末の一節をひく は、 「ふろれんしや菖蒲の粉おしろい」と訳されているが、「ふろれんしや」はわかりにくい 一節は、 いろいろな香水が体中にしみ込んでいた。 削除され、訳されていない。poudre d'iris florentine(フィレンツェ製のアイリス粉 上等のエキスが生身にまでしみ込んでいた。

dans le salon, renversant la pelle, le garde-feu. roulant comme un ouragan de flamme, incendiant le tapis et se gîtant sous un fauteuil qu'elle allait infailliblement flamber. Je me précipitai comme un fou, et pendant que je repoussais dans la cheminée le tison sauyeur, la porte brusquement s'ouvrit! Julien, tout joyeux, rentrait. Il s'écria : « Je suis libre, l'affaire est finie deux heures plus tôt!»

La bûche, oui, la bûche, madame, s'élançait

Oui, mon amie, sans la bûche, j'étais pincé en flagrant délit. Et vous apercevez d'ici les conséquences!

Or, je fis en sorte de n'être plus repris dans une situation pareille, jamais, jamais. Puis je m'aperçus que Julien me battait froid, comme on dit. Sa femme évidemment sapait notre amitié; et peu à peu il m'éloigna de chez lui; et nous avons cessé de nous voir.

Je ne me suis point marié. Cela ne doit plus vous étonner.

> わ rt わ

n

終

VC

娶

ß

ず

怪

重

ベ

き

VC

あ

ß

ず

カ>

し、(モオパッサン)

る は 結 果

ع K を n 時

જ 冷 察 6 É Ż

な r し ٤ ΙÌ あ

カコ

な 給 V 急 が

h

終

ع

| 敏訳

て、も

5

開 む

こす。わ 火は、薪 7 明 n K ح \*\* \*\* \*\* VC は 0 n カ> W 薪 は、客 0 め \* は な ン 狂 妻 カコ 0 人 間 0 わ カコ b 笑 0 K ž 7 4 顏 如 虢 ぴ な る ば あ < 5 て ゎ ځ る 境 火 K n は b ベ 箸 < 再. は n み を び 現 ぬ た 會 崩 行 して 食 身 仆 0 を 0 し は す 終 絨 Z, £ \$ みた 丸 K 毬 カン カコ きも 7 し 헝 を vc り。 二 や Ż る ع z き ベ 捕 し。其 た は 時 し 椅 n ば を 子 Ź. 爐 今 後 H カ> 0 中 後 は 友 飞 h を K K 相 0 は 見 其 落 K P 收 < B ち

(30) 141

劇

か

る は

b

Ø

な

5

だ

#### LA REMPAILLEUSE

À Léon Hennique a1.

C'était à la fin du dîner d'ouverture de chasse chez le marquis de Bertrans. Onze chasseurs, huit jeunes femmes et le médecin du pays étaient assis autour de la grande table illuminée, couverte de fruits et de fleurs.

table illuminée, couverte de fruits et de fleurs. On vint à parler d'amour, et une grande discussion s'éleva, l'éternelle discussion, pour savoir si on pouvait aimer vraiment une fois<sup>b</sup> ou plusieurs fois. On cita des exemples de gens n'ayant jamais eu qu'un amour sérieux; on cita aussi d'autres exemples de gens ayant aimé souvent, avec violence. Les hommes, en général, prétendaient que la passion, comme les maladies, peut frapper plusieurs fois le même être, et le frapper à le tuer si quelque obstacle se dresse devant lui.

かたおもひ」 0 が原文 の 萺 頭 は、 単に「もえさし」と訳されている。

「現行のおかしに捕はれけむ」

は

peu à peu il m'éloigna de chez lui(だんだんかれはわたしを自宅によせつけなくなりました)

わかりにくい訳である。これは J'étais pincé en flagrant délit(現行犯とし

le tison sauveur(我が身を救ったその燃えさし)

火の手は嵐のごとく転って行きまし

は、

敏訳だと「爐火は、

薪きは、

て捕えられるところでした)を訳したものである。

箇所は、「会食のまねきとだえ」と意訳されている。

そうです。マダム、たきぎが客間の中に飛び込んできたのです。そしてシャベルや火よけ用の金鋼を倒し、

客間に飛びて、火箸を仆し……」と、意訳されている。

La bûche, oui, la bûche, madame, s'élançait dans le salon, renversant la pelle le garde-feu, roulant comme un ouragan de flamme(ため物じす。

つぎのようなものである。

\*

に、ところの こみた ドゥベルト 72 の 談 實 L 12 Š \_ は ž 愛情 度 病 思 ひ の Ŀ の な ラ ン 戎 b 如 寄 の しい E 事 せ

か

醫者なに や、は E 侯 72 ð 及 爵 < 地 12 b 幾 び かゞ の tz 12 L てい しを 別莊狩 IJ ほ b 12 び B か つ 同 0 度 b あ L は 例 の な の 人 b せ 始 r を み か て、生花、く 襲 Ł な Þ 盛 の 宴 £ b b Ł. な の ベ る い L 諭 く、襲 人 じ で 議 を tz の 虀 論 だ は り、獵 v < ٤ b る 12 て、前 12 め せ な の 地く、 の 男 n L b あげ 12 人 子 を ø, 燈 + 隨 Ŋ は 火華 き、或 礙 つ 人 お 人、若き 5 đ の H Ġ は  $\mathcal{O}$ B か に、あ た ロ ば、人の いく 生 か なる 15 女 12 を 3 眞 性 び は、切 大食卓を 命 揃 の 八

戀

か 1: お Ŋ 上

敏訳

敏

田

人、これ

をも

τ ţ なる はた

愛 ζ.

غ

屋 は、 敏訳だと「台所」となっている。l'amour profond は、 「深い愛」もしくは「深刻な恋」とでも訳せるが、敏は「たゞ一の恋」と訳してい

「別荘」 は、 原文に該当するものがない。 敏の創作的加筆。 le medecin du pays (地元の医師) は、「ところ(土地 引用者 の医師なにがし」

と訳されている。 「あげつらう」は、 日本語の「なにがし」は、 理否を論じる議論の意。 わざと氏名をはっきりさせないときに用いる代名詞である。 談 (話題の意) ……」から文尾までは、 概ね正しい訳と思われるが、 原文の句読点を無視し、

長い文章として訳している。

つぎに巻末の一 節をひく。

Il s'en allait. Je le rappelai. « Elle a laissé aussi son vieux cheval et ses deux chiens. Les voulez-vous? » Il s'arrêta, surpris : « Ah! non, par exemple; que voulezvous que j'en fasse? Disposez-en comme vous voudrez.» Et il riait. Puis il me tendit sa main que je serrai. Que voulez-vous? Il ne faut pas, dans un pays, que le médecin et le pharmacien soient ennemis.

J'ai gardé les chiens chez moi. Le curé, qui a une grande cour, a pris le cheval. La voiture sert de cabane à Chouquet; et il a acheté cinq obligations de chemin de fer avec l'argent.

Voilà le seul amour profond que j'aie rencontréa, dans ma vie.

Le médecin se tut.

P.

時 醫

者はこ、

に默しぬ

Alors la marquise, qui avait des larmes dans les yeux, soupira : « Décidément, il n'y a que les femmes pour savoir aimer! »

Maupassant: Contes et Nouvelles 1, Gallimard, 1970より。

| 敏訳|

す あ

か

ヶ tz まま ţ 辭 禮を b æ. 犬 れこ の へばたちどまり L は せ 去らむとするを呼びとめて、まだ老馬と二 臺 to か 2 ì 所 þŝ か までに ځ ι 許 ij ผู 12 あ b 養 な 知りし 'n 已むを得ざる事 Ŋ たの御勝手で拂て ていかなに、要りませ 武 か à の 72 ø ٧-金に 裏 τ の 12 なり。 戀 鐵 朋 御 は 道 地 ح 株 仕 あ ん、僕が n 狹 Æ. b 舞 なっさ なり。 枚 ŧ Ł ひを求 田 て、牧 DC. 持 含にて踏者と い」と、笑ひ出 . 0) τ め 師 犬 居 12 は が τ 5 馮 も致 ありま をつ し、握 ŗ 方 n 薬屋とは す が 手 Ø かっ な した 3 御 Ļ ø 望 で 敵 n で は 車はシュ ば、お たりが

1 侯爵夫人、涙ぐみ給ひて、うるみ聲 に、まことの情愛は女に限る b Ø E 候 は ず

(モ オパッサン)

ll s'arrêta, surpris は、 「かれはびっくりして、 足をとめた」 の意であるが、 敏は surpris(びっくりして)の語を訳し落している。 cabane 小

息の

る。

ゅうぶんに伝えていないうらみがあるといえよう。

以上のごとく敏の翻訳三つを大観すると、

少なからず創作

的

加

筆、訳

でし落

意図的

削除、

意訳部分などがみら

ħ

原作

:の情!

趣

味

行わい)

10 E

LÉONIDE ANDRÉIEF

#### L'ÉPOUVANTE

TRADUIT DU RUSSE

PAR

T. DE WYZEWA ET S. PERSKY

#### PARIS

PERRIN ET Cio, LIBRAIRES-ÉDITEURS
35, QUAI DES GRANDS-AUGUSTINS, 35
4903

1903 ous droits réservé

上田敏がアンドレーエフの「心」(「思想」のこと) を訳したとき利用したものとおなじ仏訳本。[東京大 学文学部図書館蔵]

九

五八、

奄美大島に生まれ、

ニコライ神学校卒。

のち母

べをやってやる」(花袋『東京の三十年』) 島崎藤村·戸川 明治四十二年 『文学界』 八秋骨• (一九〇九) 馬 明 湯孤蝶 治 26 七月十五 1 樋口 同 日 31まで刊行) 葉 と気焔をあげ、 -雑誌 田山花袋• 『無名通 0) 同人であった上田 玉 同席者をおどろかしたが、 信 独步 (第七号) 柳 田 は 敏 国 男らを前にして、 (紅顔の金ボタン姿) 「翻訳界の恥 後年敏は誤訳問題の渦中に巻き込まれるのである。 辱 「鷗外さんなんか誤訳ばかりしている。 は は誤訳以 根岸における新年会の席 上の出鱈目 訳 語学の欠乏、 今に誤訳 北村透谷 理解 力

未熟」といった人さわがせな見出しのもとに、二段組誌面の五~一○頁にわたって、

Ŀ

一田敏の翻訳

ロシアの世紀末を代表する小説家・

『心』(ロシア語の現代は MbICJIb(「思想」の意)――に筆家であるアンドレーエフ(一八七一~一九一九)の中編小説

誅を加えた。

って責めたのは、翻訳家の昇曙夢(本名・昇直隆、一八七八敏の訳の欠点をあげつらい、それをでたらめな訳だ、とい

校の講師となる)であったようだ。

ものであった。 た。 た第一号であるが、アンドレーエフの作品を全部で六篇訳 F. 問題の 田 一敏は、 『無名通信』 わが国においてアンドレ 0) 記事の 冒頭部分は、 ] エフを初 つぎのような めて翻訳



昇曙夢

であれば、 スキーによる、 『心』(春陽堂、 評者は、 訳者のつごうで変えてもさしつかえないが、ここで「心」と訳しては、 へき頭第一に、 つぎのようなフランス語訳に基づいて重訳したものである。 明治42・6刊、 原題の ほかに「旅行」「クサカ」の二篇も収録)は、 「思想」を「心」と訳したことをもっての外の話である、と非難した。本文と関係がない、単に標題だけのこと 一九〇三年(明治三十六年)に刊行されたド・ヴィンゼワとペル 作品全体の意義を無視することになるという。

Léonide Anderéief: *L'Epouvante* , traduit du russe par T. de Wyzewa et S. Persky, Perrin, Paris, 1903

注・この仏訳の原題 L'épouvante は、「恐怖」または「不安」の意。

『無名通信』の罵倒文を書いた当人は、 敏がこの仏訳を「東京の一書肆 フランスには古くから多数のロシア人が入り込み、 (丸善のことか 敏がロシアの原書から訳さず、フランス語訳から重訳したに違いない、と推測した。このことは当ってい 引用者) フランス語を国語のように使っているから、 で購っ」 たのは、 明治三十六年(一九〇三) いかがわしい英訳とはちがい、 の春のことであった(『心』の序文)。 信用の置ける

訳と考えた。

をつかまえることである。これがわかっていないと、 の罵倒者は、 訳者は原作者の狙いどころ、すなわち作品の中心思想をまったく理解していない。翻訳においてもっとも注意すべき点は、原作者の作意、 アンドレーエフの つぎの点を指弾したが、仏訳によらず、 「思想」という作品は、 狂気をよそおった主人公が、自由思想に導びかれ、 原作の調子が訳全体に移ってこない。 ロシア語の原書をひもといて問題箇所を摘出した。その要点をしるすと、つぎのようになる。 友人のサウエロフを殺す、といった話である。 主題 敏

があり、 おどろくほどの省略法を用いている。 まったく別物をよむような気がする。 聞きなれぬかれ一 流の漢語や砕けない言葉の連発。 上田氏の訳は、 原作を読んだときの印象とは雲泥の差

た。三分の一は、 訳文の粗漏 翻案よりもまだ浅ましい。所々に誤訳、 (いい加減さ、手抜かり) ときたら、 たしかに省略されている。原文にない、いいかげんな付け加えがある。 粗漏、 てんで話にならない。 臆断、 誤解、 省略、 ごまかしがある。 はじめは全部原書と対照しようとしたが、 これが翻訳なら、 世の中に翻訳ほど当てにならぬものは 対照どころの騒ぎではなかっ

やすい誤訳をなさっては、小学児童の笑い草にでもなりはすまいかと冷汗が流れる。 雀ず (ウオロベイ) を燕と取りちがえた点など、 訳語の当らないのも随所に散見する。 いやしくも「東京 上田敏」ともあろうものが、こんな見

42 8 • 1 た。 敏が訳書『心』を出版したとき、 帝大の教授がこのように虚仮にされては立つ瀬がないが、 8・2)。その上の冒頭の一節は、 職階は京都帝国大学文科大学教授(高等官三等)であり、 つぎのようなものである。 上田敏は 『読売新聞』紙上において二回 西洋文学第二講座を担当するれっきとした教授であ Ę 下)にわたって反論した (明治

## 小生の翻訳 上

## 七月廿九日京都にて 上田敏

信 七月二十五日、 に載つて居るさうだ。一應それを拝見してと思つて、 二十七日の貴紙附錄所載、 一記者の文に依つて承知したが、 京都の雑誌店三四を探したが、 小生のアンドレイエフ飜譯について、頗る激烈な罵倒文が雜誌 遺憾ながら今に手に入らない。そちこちして居るうち遅くなる 「無名通 『読売新聞』(明治42 発表した誤訳問題に関する反論

> から、 簡短に返答する。

當た ある。 が故意に誤脱をし誤譯をした事の無いのは、 第 それに小生は又一歩を進めて、 彼の罵倒文に對して、 小生から辯を費す必要はもう無いやうだ。 かの評家の露語の智識、 明瞭であつて、 かの罵倒家の評は少々無理であると迄言は 否 日本語の智識をさへ疑ひたくなった。 貴紙一記者の判定に據れば、

「老婆の乳のやうに、だらりとした……」

貴紙に據つて、一例を引くと小生が

(此頃見た獨逸譯にもさうある。

としたのは大間違で

「年增の胸の様に凸凹した……」

皮肉を言はうとはせぬ。 るまい。 と訂正す可しと力味んであるが、 又此滑稽な評の直ぐ下に 日本語で 「當擦る」とは暗に誹る事である。 「譯者は風船の様にと當こすつて」とあるのも珍妙だ。 年増になると胸に瘤が出來るか知ら。 かういふ評家とお對手は御免蒙る。 なんぼ露西亞でも、 小生は何も飜譯で そんな事はあ

いう純粋主義 ためであった。 敏によると、 明 治 用語を純正にしたいと思った。 の国語は洗練彫 琢たく (みがきのかかったもの) かれが外国文学を翻訳した動機というのは、 が必要であるという。 か れは言語学で この目的

他に文芸としてすぐれた良好の翻訳が出るまで、 、なるいまの新作家の短編を移植するとき、 「思想」を直訳せず、「心」としたのはいろいろ勘考のうえでのことという。 なぜ衒学的な それ相応の役を果たすものである、 "逐語訳" にこだわる必要があるのか。 仏訳によったこの翻訳は、 と明言した。 語系の

ユ

・ゲル訳のシェイクスピア、 イギリスのコールリッジやロゼッチらの詩の訳業にしても忠実なしごとでは

ない、

といって反論した。

これにたいして『無名通信』 (明治42・8・13付) は、 「『小生の翻訳』を読みて上田敏に答ふ」と題す

小生

れて 差さ

ゆかぬ、 うな、 さらに追撃する必要もないとは思ったが、『かういふ評家とお対手は御免蒙る』というずうずうしい遁辞に対しては、そのまま見のがすわけには る論駁記事を出した。 そうでないような、きわめて不得要領な(わけがわからない と書いた。 冒頭記者 (執筆者は昇曙夢であろうが) は、 このあいだ上田敏氏は、『読売新聞』に「小生の翻訳」と題して、 -引用者)人名辞書体のものを書いて、 逃げるように退却した。 逃げた者を 弁解文のよ

かっただろうが、 一田氏は、 誤解の指摘とは縁もゆかりもない、 あいにく狙ひ所がちがっている。 わたしの日本語の誤りをたいそう仰山らしく指摘しておられるが、 鬼の首を取ったようにうれし

訳 わたしはけっして一語 誤脱、 誤解、 粗漏の数々を指摘し、 一語の附加 脱落、 あわせて作品の主題が訳者にじゅうぶん了解されていないということをいったのである。 すこしばかりの差異をひろったのではない。 多くは全体の文句として、 文章としてのはなはだしき誤

取捨選択の標準をもって到底律しがたきものである る」といわれている。これに対しては、 上田氏はじぶんにつごうよさそうな外国の事例を勝手に引いて、「逐字訳必ずしも忠実訳にあらず」「国語の約束に依つて多少の取捨は容してあ ある程度までは同意見だが、唯ひとり上田氏の『心』のいみは逐字訳、非逐字訳の差別以上に超然として、

ねた所で誤訳は依然として誤訳、 本誌の批評は、 誰がみてもわかる通り、けっして罵倒でも何でもない。 誤脱は依然として誤脱である。 以上が、 論駁記事の要旨である。 事実ありのままを少しも誇張せずに書いたものである。 いくら人名を列

この誤訳論争は、 上田敏からの反応、 『読売新聞』 ゃ 『無名通信』 側からの新たな論議もなく、幕をとじた。

と直かに対照して議論を進めているが、 『無名通信』 の誤訳指摘者は、 論峰するどく上田敏に詰め寄ったのであるが、 敏が拠ったフランス語訳の精度を問題にせず、 肩すかしをくらった感がある。 また仏訳とを照らし合わせていないのである 評者は敏の訳文をロシア語の原文

敏が訳した『心』は、 はたして数多の誤謬が指摘されるようなものであったのかどうか、 「思想」のフランス語訳と訳文をつき比べて検討して

みよう。

「心」(「思想」)の原文は、つぎのようなものである。

鑑な密はの記さ を状に様うエ 受驗 定。問》類。草。入三一 けの診と起き態はま # 北、 に、の末り、院を人 た ぁ 断さにた Zi ケ 百 基\* 當5 を た -5 で のせど 先にる 礎、時、説。始・前。あ 年元 日の多に為った U ح. か先。シ異プラン 4-5 に 明。末りの 物がく 集し書は後にた な 故。の 月 常種はツ っ っ を 事だが L 々らつ 七片 Ţ た交の鑑える 1: 門之べ 他まに <u>--۲</u> 點のは 定 7 家\* エ 事。人》日是 の 掲\* 人汽 が カゝ ጉ 材をげ 5 あ 實。殺。醫 糯 ĥ = 料する 許 詳,神 師い ル ッ 9 \$. を の 細語病 て. ア ţ 15 + ž 共りが 提品 に院 ĵ. が 1 た此が北ト 其。出りツ 博品級パヘ 法に書いし 犯罪 士"重§送ኛ Ł 人た 當り 翳が類。て は 8 1 5 ŀ١ 學で、此。自 鑑な取りれ の時のグ 疑が精だの 上。あ事の分を 定る調にて のる件で 念神を模りす 人たを 經

見。事をを る男質言で 興には 異語 自。除。無。 人にははへ B な 述 定 また つ 物が人とこ 丰 分だの n ゼ 好美礼 白って = O あ 7 は ĵ. っ ŀ١ u Ø ほ 平分える Ħ 殺 3 n 単たに な に 単な 弦か 君第 斷 す ځ 常かた フ L 或 ょ 親か数が はた 物。 9 狭り純気に 自 ľ る 窄で始た分電 人。大馬 中,男類が 性を密すら b な自じを 學作 學ャア 此。非な、無。め 11 知り分え愛なに 以ッレ いて 今至今日 狸:常や 進! 鐵事語 拘; 合。と ι 來はク にに 君なむ はは τ ん の・シ ぁ 重りの に が 他! 氣\* で 友; ス 大"鎖"氣 は ゐ 3 人。二 輝んに Ø な てが 此。得《日 ρ 自。又ま方ま付。事。ず 数は無いよ か な 志ます 件、逐、此。 っ ほ つ く ス 分が諸いかか 合った 念た 交掌 ダ は君に付っ n が一い事 局{暴\*件以 ٤ 際。 學ャン 3 然に つ 確さに < 外。露。 問とナ 信は行で 起さし た は を 男な誰に續にはノ す大協のあ 者りす け互びず で て Ġ 3 1=

## LA PENSÉE

Le 11 décembre 1900, le médecin Anton Ignatiévitch Kerjentzef commit un assassinat. Les circonstances du crime, de même que différents faits qui l'avaient précédé, donnèrent lieu de soupçonner qu'il y avait quelque chose d'anormal dans l'état mental du meurtrier.

Conduit à l'Etablissement de psychiatrie Elisabeth pour y être examiné, Kerjentzef fut soumis à la surveillance minutieuse et sévère de plusieurs spécialistes expérimentés, parmi lesquels se trouvait le professeur Djémnitsky qui vient de mourir.

Un mois après son entrée à l'hôpital, le D'Kerjentzef présenta aux experts un mémoire écrit par lui, et dans lequel il donnait des explications sur ce qui s'était passé. Voici ce document qui, joint à d'autres matériaux fournis par l'enquête, servit de base à l'expertise médicolégale:

## Feuillet nº 1

Jusqu'à présent, messieurs les experts, j'ai caché la vérité, mais maintenant je me vois forcé de la dévoiler. Lorsque vous la connaîtrez, vous comprendrez que l'affaire n'est pas aussi simple qu'elle peut le paraître aux profanes. Ce n'est pas simplement un de ces actes qui conduisent à la camisole de force ou à la mise aux fers. Il y a là quelque chose d'infiniment plus sérieux, et qui, j'ose le croire, vous intéressera d'avantage.

L'homme que j'ai tué, Alexis Constantinovitch Saviélof, avait été mon camarade au collège et à l'université, bien que nos études ne fussent pas les mêmes; comme vous le savez, je suis médecin, et lui suivait les cours de la faculté de droit. On ne peut dire que je n'aimais pas le défunt; il m'a toujours été sympathique, et je n'ai jamais eu d'ami plus intime que lui. Mais, malgré tous ses côtés attrayants, il n'appartenait pas à la catégorie des personnes capables de m'inspirer du respect.

注

Je ne me souviens pas quand me vint pour la première fois l'idée de tuer Alexis, mais je sais que, dès le premier instant, elle me

devint aussi familière que si elle était née avec moi. Je sais que j'avais envie de rendre Tatiana Nicolaïévna malheureuse et que, d'abord, j'ai imaginé beaucoup d'autres projets, moins périlleux pour Alexis. - Car j'ai toujours été l'ennemi de la cruauté inutile. — Grâce à l'influence que j'avais sur lui, j'espérais le rendre amoureux d'une autre femme, ou le jeter dans les excès de l'alcoolisme (il avait un penchant pour la boisson): mais ces moyens ne valaient rien, pour cette raison que Tatiana Nicolaïévna se serait ingéniée à rester heureuse, même en le cédant à une autre femme, même en recevant ses caresses d'ivrogne. Il lui fallait cet homme, et elle serait toujours son esclave, quoi qu'il arrivât. Il y a de ces natures serviles.

が、そ 元にの な 酒にん 來に女にい 中が 暮が 自。危險 起きす 分だく 臭な彼に Þ は 策 奴 篏 幸 は 無 ŀ١ 3 ĵ 自然不かい に 體 は は ら 勉?で 役?少! せ 3 分於 斷於 他影 抱にしたはか の 2 .j න 付。立"酒"り ら手 あ た ぁ 8 1: か 大きの無し段だ か 奴との 3 82 ŀ١ 酒;男红盆; も 隷は男にら ż 夫 け 家\* の が の随る の みぞ Ø 女なが 過りに 心、殺力 他りき は l を。生き考 織 っ . 5 1 ح 依"のる τ 左。や τ 然 女 方; や 右。殘。見。 h 人だな 打さとに で 3 し刻た つ τ 込し 關いあ 事: 得'の事: った。然本・ る行猿 τ 係以 Ą 澤\* ゐ h 山える 7 幸すし を 好。つ 居。世。る 脳だよ の何にうしる値また

如"し て B 何 τ b ゐ ν j 古もな ૃ 馴じい 思、染、此。 考が 2 で あつ 自『 ż た。 分光 ŝ ૃ っ 力 ダ 1= + 生。思想 ス ャ n 立 に ナ た っ 取 た っ を か 不⁴の τ の ę, か 幸ずや に j 記 に 憶\*

第 à l'université「大学時代の……」や comme vous le savez, je suis médecin, et lui suivait les cours de la faculté de droit「こ承知のごとく) 節 の訳文は、 大きなあやまち らはな 第二 節 目 0) 主人公の 「手記」(Feuillet n° 0) 中に は 語脱が いくつも散見する。

わたしは医者であり、 えば敏は、 かれはといえば法学部の授業に出席していた」 の箇所は訳されていない。

いまなら「局外者」

は

「門外漢」、

「狭窄衣」

は、

(狂人用)

拘束衣」とでも訳すところである。

つぎにもう一節原文を引いて、

敏の訳しぶりを見てみよう。

冒

頭

132 (39)

こうして敏の訳には、 dès le premier instant「はじめから」は語脱である。d'abord「まず」「最初は」も語脱である。 の意である。 敏は古風な表現を開いた。Il lui fallait cet homme「彼女にはこの男が必要であった」も、 脱行が多々あり、 翻訳者としての姿勢を問われてもしかたがない部分があったことは否めない。 日本語の「嵌らせる」は「(女に) 同じく語脱である おぼれさせ

\*

七五、 敏の誤訳論争は、 『大阪毎日新聞』 七、 記者、 八月の二ヵ月ほどで終そくしたが、『無名通信』の記事をよんだ和気律次郎の月の二ヵ月ほどで終そくしたが、『無名通信』の記事をよんだ和気は 翻訳家) は、この記事に触発されたものか、 『新小説』第一四年第一一巻 (ペンネームは水上規矩夫、一八八八~一九巻くお) (明治 42·11) 0) 「譚叢」において、

粥 杖 (御風氏孤雁氏)

注・粥杖とは正月十五日、あずき粥を煮るときの燃えさしの木を削ってつくった杖。

従事、 べたあと、「御風孤雁二氏の誤訳に至つては驚くより外に途はあるまいかと思ふ」とある。 集に従事)と吉江孤雁 といった表題のもとに、 のち四年にわたる留学をおえて早大仏文科教授)の訳業を批判した。「上田敏氏の誤訳事件には大に議論すべき余地が有ったが……」との (本名・喬松、一八八○~一九四○、 相馬御風(本名・昌治、一八八三~一九五〇、明治から大正期の詩人、評論家。早大英文科卒業後、「相馬御風(本名・昌治、一八八三~一九五〇、明治から大正期の詩人、評論家。早大英文科卒業後、 明治から昭和期の詩人、フランス文学者。早大英文科卒業後、 『新古文林』 『早稲田文学』 の編

した。 してこの二人の誤訳が、 フ短篇集』(『猟人日記』一八四二~五二)は、もしこれらが〝翻訳〟と呼べるものなら、世の中に翻訳くらい容易なことはあるまい、という。 御風が訳したトウルゲーネフ(一八一八~八三、ロシアの作家)の『その前夜』(一八六〇)『父と子』(一八六二)、 いかにはなはだしきものであるか読者諸君に紹介したい、といい、 具体的に原文(英訳)を引いて、そのまちがいを指摘 孤雁が訳した『ツルゲー子

ŧ たとえば、『父と子』を例にとると、一頁に平均一ッ半誤訳があるから、 御風氏とおなじように一頁に二ッ位あるという。だから『ツルゲー子フ短篇集』の誤訳の総数は、 一冊三五九頁のなかに五三八・五あるはずだという。 数百を算するであろうと、のべている。評 孤雁氏の翻訳に

家が相馬と吉江に求めた点は、 対照することの労を惜しむから、看板にいつわりないよう注意していただきたいというものであった。 今後は翻訳家としての責任をまっとうして欲しいこと。文章の上手へたは差しつかえないが、 一般読者は、 原文と

は 『やまと新聞』『早稲田文学』 治四十二 翻訳雑話」 一年九月中旬 (三段組み) -上田敏の反論 を掲載した。 の記者。 『明治大正見聞史』春秋社、 執筆者は生方敏郎 「小生の翻訳上下」 が出、 (一八八二~一九六九、 誤訳論争がおさまってから 大正15・11を著した)である。 随筆家・小説家・評論家。 『読売新聞』 早大英文科を卒業後、 日 曜 版 明 治 42 9 19 付

せに 面でさわぎ立て、 れるようになったこと。 この記事は、 『読売新聞』 翻訳についてのとりとめのない話をしたものだが、一ヵ月以上も前の誤訳論争が歯切れのわるいものであったから、 一つでも他人の失策をみつけると、 の方で用意したものかも知れない。 訳者は原著者の崇拝者か研究者であったりすればひじょうによい。 鬼の首でも取ったように天下に呼号する 生方の記事の要旨は、 つぎのようなものであった。 近ごろ誤訳告発が盛んになっている。 西洋文学の翻訳が近 古株連がけんか ころだいぶ読ま その埋め合わ

翻訳の方法は、 べきである。 誤訳だ重訳だというようなコセーーしたことは、 翻訳といえば、すぐ思い出す名前は、二葉亭氏と森鷗外先生である。 鷗外氏を学んで、それより一歩も出ていない。 衒学者や中学の文典教師らにまかせ、 等々。 上田敏氏は西洋文学の紹介者として、文献に偉勲ある人である。 訳者はよろしく原作者の心のなかに入ることを心がける

している。 れたる露西亜文学につきて」を発表した。 い逐語訳であればよいというのではない、 生方のこの記事が『読売新聞』に載って十日ほどすると、 わたしもまたこの意見である。 といった。 その趣旨はつぎのようなものである。 その訳が一般読者をおもしろく読させるのでなければ、 『無名通信』はロシア語学者・八杉貞利(一八七六~一九六六) かって文壇のある大家は、 何にもならぬ、 外国文学の翻訳は、 0) といったことを記憶 「我国に輸入せら ただ誤訳のな

界に伝えるのが今日の急務である。 えるにつけ、 多少の誤訳や字句の違いがあったとしても、 その大綱のうえから、 小さいことはこれを大目に見、その貢献を歓迎したい、と述べた。 ささいの誤訳があるからとて全体を棄てることをじぶんはしない。 量においてはなるべく多く、 質においてはなるべくおもしろく訳して、 ちかごろロシア文学の誤訳ばなしがよく聞 外国文学の趣味をわが ﯘ読書



森 鷗外



向 軍治 (『三田評論』昭和37・1)より。

## 森 鷗外

義塾大学のドイツ語教授・向軍治(一八六五~一九四三、独逸学協会学校、 どは文壇の寵児のひとり森鷗外(本名・林太郎、 当時の翻訳界において一頭地を抜いていたのは |田敏がじぶんにたいする誤訳告発の弁明文を『読売新聞』に載せた約三年後、 一八六二~一九二二、明治から大正期の軍医、 (他よりもぬきんでていたの意) 神教神学校にまなぶ)によって、その訳業を非難された。 森鷗外であった。 明治四十五年(一九一二) 小説家・評論家・翻訳家) 五月二十九日と三十日に、 が、 同紙において慶応

ウスト』 Menschen, 1890) であり、 たことであった。その記事は、 が槍玉にあげたのは、 が、 幽霊のような翻訳にでもなったら、 ついで文部省の文芸委員会が、ドイツ語のできない鷗外にゲーテの『ファウスト』(一八○八~三一)の翻訳を委嘱し 鷗外訳 題して「森鷗外氏の翻訳と文部省の責任 「寂しき人々」(ドイツの劇作家・詩人ゲルハルト・ハウプトマン [一八六二~一九四六] 世界の物笑いはともかく、 上下」という。向によると、ドイツの国宝ともいうべきゲーテの『ファ 神聖な芸術にたいして申し訳ないという。 ©Die Einsame

訳書『寂しき人々』(明治4・2・16~4・25までの間、

『読売新聞』に掲載され、同年7・1金尾文淵堂から単行本として刊行)

は、

向による



鷗外の訳業を批判した向軍次の記事(『読売新聞』明治45・5・29付)

なやさしい文章すら容易に読めない人に、ゲーテやシルレルのものが読めるはずがない。 と森氏の訳はいかにも 「寂しき人々」と同じようなものであるなら、 \*\* 無雑\* (ことばが乱れ、 文部省も考え直したほうがよかろうという。ハウプトマンのよう 筋道が立たぬもの)であるという。もし「ファウスト」の訳が、

つぎに引くものが、 問題の一部分だという。

大変面白い御説教だったね。 向軍治訳 ね ゲーテ。

て貰ひたく御座いません。 お母様それは却て困りますよ。 私になんぞ似

まるでゴライアスの手の様でございます。

お父様、 の中より遙暖です。 汝われを祝せばさらしめず 只今は外の庭が余程宜しう御座ります。 (聖書の句

部

皆貴君の先生ですか。

主人 君は何ぜ笑ふの。

画 僕?

(主人)

面白い?

何故だつて面白いからさ。

[森鷗外訳

今の御説教は好く出来たぢやないか。 お前さんはさ

私になんぞ似ては困ります。私は似て貰はうなんぞと う思はないかい(六頁)。 どうぞ、お母様そんな事を仰やらないで下さいまし。

は思てゐないのですもの

(八頁)

ざいますね。あのヘラクレエス様のやうなお手々でご それ、あの大きな棒を持つて入らつしやる神様がご

ざいます (九頁)。 よしや汝我を祝すとも我汝を免さじ(二三頁)。

ますが。あの却て室内よりあちらの方が暖い位でござ お父様、 あちらの外の方が庭が見えて宜しうござい

(二九頁)。 いますの云云(二八頁)。 この先生方の講義をみなお聞きになつたのですかな

(主人) 君何を笑ふのだい。 (画家) 僕かね、 なぜ問ふのだ、

主人 君は面白 11 のかね。

面白いから笑ふの

いのかね(三一頁)。

ない。 しないで出版している等々。 向が指摘する鷗外の欠点は、⊖ 古文体がじょうずではあるが、その言文一致は文にも何にもなっていない。⊖ 原著者の言外の意味を玩味でき (三) 平易な文のくせに誤訳が多い。(四) 会話における語呂 (ことばのしゃれ) を理解できない。 因 口述の翻訳を筆工に書かせ、 そのまま訂正

ウスト』は、大正二年(一九一三)一月から二月にかけて二巻本として冨山房から刊行された。 そして向の結論は、まだ『ファウスト』の訳が出ないから、 文部省の責任を問うのも無意味ではない、というものであった。 けっきょく『ファ

鷗外は『読売新聞』に載った向の記事をよんだようであり、その日の『日記』に、--

(明治45・5)

二十九日(水)。(前文略)向軍次の Einsame Menschen 誤訳指摘読売新聞に出ではじぬ

と記した<sup>©22</sup>

三越(23) ずである。鷗外には 『読売新聞』に載った向の誤訳指摘の記事にたいして、鷗外は何ら反論を発表しなかった。が、内心批判者にたいしていろいろ不服があったは (第二巻第十号) に "鷗外" の署名で発表された。 「田楽豆腐」と題する短篇小説がある。 明治四十五年七月二十一日に書きおえ、大正元年(一九一一)九月一日発行の雑誌

作品の冒頭一、二ページに、主人公の木村(おそらく鷗外本人のことであろう)と女房との間で、つぎのような会話がおこなわれる。

――あなた植物園へ入らっしゃってと、台所から細君が声をかけた。

そうさなあ、往こうと思っているのだが、と、木村は新聞の間に畳み込んである附録を引きだして広げながらいった。

---いらっしゃるなら、涼しいうちにいらっしゃいよ。いま何をしていらっしゃるの。

この話し声にまじって、洗った皿をカゴの中に伏せる音がする。

――いまかい。蛙を呑んでいる最中だ。

台所で細君がみじかい笑い声をもらした。「蛙を呑む」というのは、エミール・ゾラ(一八四○~一九○二、フランスの小説家)のことばであ 作家は毎朝、 新聞で悪口をいわれる。その悪態をぐっと呑み込むのだ。生きた蛙を丸呑みするようにがまんするのである。主人公の木村は

毎日のように新聞で悪口をいわれている。 いっとき最んに翻訳をやったので、翻訳家という肩書がついている。

ところがついこの間、 勇猛な批評家(向軍治のことか)が出て、木村の翻訳は誤訳だらけだと喝破した。それは大いにうけた。木村を弁護する

者でも、 誤訳でないまでも拙訳 (まずい訳) だといった。そのため木村の書くものには何一つ価値のあるものはないということになった。

いま木村は、新しい肩書きをちょうだいした。「誤訳家」というのが、それである。この夏から各紙には、いろいろな批評家が入り替り、 立ち

替り、誤訳者木村をひやかしている。

例の誤訳退治のとき、細君は

―あなた本当に間違っていないのなら、なんとかいっておやりなさいな。

というと、木村は

―ところがなんともいわないね。

といった。

―では間違っていたの。

というと、

――間違いなもんか。間違えたって、蛙のみつけるような間違いはしない、といった。

この短篇の制作時期から考えて、この作品は読みようによっては、 鷗外のうっ憤を晴らしたものと考えられよう。

しかし、『ファウスト』

の翻訳が公刊さ

の中に自由自在に駆使せられている。 洗練せられた日本語の集大成である。

日本語の改造という点からも、

興味ある問題を提供して

おそらく日本文学としてかって見ない豊富な語いが、

翻訳の中味にはいっさいふれず、あたかもこの邦訳が雅馴な日本語の形成に資するような批評である。

いる。

指摘した れてから、 (大正二年九月以前の号であるらしい、未見)。その指摘にたいして、 伊庭孝、 杉梅三郎、 向軍治、 沼波武夫などから、 翻訳上の誤りについての指摘をうけた。中でも向軍治は『新人』という雑誌で誤訳を 鷗外は「向君には私はまだ礼を言はずにいる。 新人の書振では、

私なんぞが礼を言ったって受けられぬかも知れない。しかし、とにかくここで感謝の意だけ発表しておく」(「不苦心談」)と、応えている。

摘する記事をのせた。やり玉にあげたのは、 雑誌 『新日本』は、 大正三年 (一九一四) 主として 七月末から十一月末まで四回にわたって「日本に於けるイプセン劇の誤訳を嗤ふ」と題する誤訳を指

森鷗外 草野柴二 千葉掬香

島村抱月 湯浅温 柳川春葉

佐藤紅緑

植物学科卒。 ら四名である。 のち札幌農学校教授。 批評者は 「尻沢辺の布刈」といった変わった筆名をもつ水産植物学者・遠藤吉三郎『『『『『記』で、 あかり 明治4~大正3年までドイツ、ノルウェー、イギリスに留学した)である。いまこれら七名の訳者のうちから、 (一八七四~一九二一、二高をへて東京帝大動

- 訳語が原文の荘麗典

雑誌

研究し、

そ

鷗外訳『ファウスト』(冨山房、大正二年一月~二月刊)の書評めいた記事として、

森鷗外の訳文「ノラ」と島村抱月(一八七一~一九一八、 ノルウェーの劇作家)の 本脚 人形の家(完)抱月訳」(一八七九年)の訳業についての遠藤の批判に耳をかたむけてみよう。 明治から大正期の評論家・劇作家、 のち早大教授)によるイプセン(一八二八~一九○

は、大概英又は獨の譯本より、唯だ聊、殊者を養えたり。是れ從來現はれたるイブセン、は別の和譯は、大概英又は獨の譯本より、重譯せしものなればなるべし。我れの如き覺衣たることあり、此頃附に乗びてイブセン劇の和譯は、大概英又は獨の譯本より、重譯せしものなればなるべし。我れの如き覺來なき力にて、名ある文學家の無執りてものせし飜譯にて、名ある文學家の無執りてものせし飜譯にて、名ある文學家の無執りてものせし飜譯にて、名ある文學家の無執りてものせし飜譯にて、名ある文學家の無執りてものせし飜譯にの力して、批評がましき事書き聯ねんは、素より鳴いの力ざなるは萬々承知の上なれど、そこは宣呼の力ざなるは萬々承知の上なれど、そこは宣呼の力ざなるは萬々人と言言。「

ウィリアム・アーチャーの英訳とランゲの独訳から訳した。 このあと批評家の遠藤は、 ノルウェー語の原書と鷗外と抱月の訳とを対照しつつ、両者の誤りを指摘している。鷗外はドイツ語訳から、 第一幕目に現れた日常の慣用句を両者は、 つぎのように訳しているという。 抱月は

東京の書店にてイブセンの何々と求むれば、常年の年でもほん。4年の年では、1970年の日本では、1970年の日本では、1970年の日本では、1970年の日本では、1970年の日本の日本の日本の日本の日本の日本

乳れの飜譯者も Ibsen をばイブセンと讚むがい。

[遠藤訳]

大奮発でしたね。

[鷗外訳]

好く思ひ立ちなすつたのね。

抱月訳]

勇気がありますね。

	魚の如く新鮮に。
ましたの。	えゝ~~、清水の中のお肴のやうになつて帰り
	鍛へた様に達者になりました。

ねッねッ。	如何にも御尤で。	
どうでせう。	なんでもないのよ。	ましたの。
出来ますか。	なあに誰でもないんですよ。	

誤訳とみとめられる例をさらに列挙している	その他、
れる例をさらに列	誤訳とな
る例をさらに列	みとめられ
に列	る例をさ
している	に列
90	している。

正に其通り。如何にも其通り。

確実です。

まあ、そんなものですわ。

えゝ。

確かにさうです。

(「人形の家」のこと) の批評をよみ、その内容	らいたい、ということであった(「現代の翻訳界に警告す」『帝国文学』第十一巻第九号所収、	調がまったく失われている、という。評者がいい	周がまったく失つれている、という。平者がい文字通り訳しているため、何の意味か理解でき	遠藤によると、鷗外と抱月の訳を比較すると、前者は原作の一句をも省略せず、	遠藤によると、鷗外と抱月の訳を比較すると	用達小僧。	奥さんは御気が強いですね。		おや又あなた、其事で妾をチョスのね。	お前は矢つ張り女で御座候。
(「人形の家」のこと) の批評をよみ、その内容の全体に不服をおぼえ、「単語の評に答ふるに単語の評を以てした」といい、反論めいた記事を	に警告す」『帝国文学』第十一巻第九号所収、明	調がまったく失われている、という。評者がいいたかったのは、イプセンを翻訳したければ、ノルウェー語を十年学んだのち、まじめに訳しても	文字通り訳しているため、何の意味か理解できないところが多々あるという。一方、後者は簡略にすぎ、	前者は原作の一句をも省略せず、精細をきわめている。		<b>傅便</b>	はあ、ひどく大膽ですね。		又あの事を云つて、わたしを揶揄ふのね。	こら、お前は矢張り女だなあ。
5の評を以てした」といい、反論めいた記事を	明治38・9)。鷗外は『新日本』に出た訳文ノラ	ウェー語を十年学んだのち、まじめに訳しても	すぎ、原作から遠く離れている。原文の意義情	いる。しかし、あまりにも直訳にすぎ、原文を		使いの男	思い切りがようがすな奥さん。	私をからかうつもり。	あら、あなたは、またそんな事を言ひ出して、	これ、ノラ!お前は何て女だらう。

『歌舞伎』第一七四号(大正3・12・1)に発表した。この記事は、のち「亡くなつた原稿」と題して『妄人妄語』に収められた。

脚下に蠢いてゐる私や島村君は、どちらもノルヱイ文を見たことがないのだから、私にしろ、島村君にしろ旨く譯し當てゝゐたら、それは偶中(まぐれ の原文に據つて右の二つの譯の當否を裁判することにしてある。詰まりすばらしく高い處に地歩を占めて、私と島村君とを脚下に見て、 えらい事を言ふ。

あたり

-引用者)である。頭から當るも當らぬもあつたものではない

れたら、二人の譯の當否と云ふものが定められたであらう。併し高く止まつてゐる評者は、 私は批評を讀んで腑に落ちぬ事が多かつた。そこで何か書かなくてはならぬとなつた時、 評者はノルヱイ文に據つて宣告をするにしても、若し私の譯をばドイツ文に引き較べ、島村君の譯をばイギリス文に引き較べるだけの手數を掛けてく 批評の評を書かうと決心したのである。 そんな事をするのを屑しとしない

私はX記者を待たせて置いて、大急ぎで書きなぐつた。

鷗外が不満におもったのは、 評者がじぶんの訳と抱月の訳との主なる違いを指摘せず、ただ訳の単語の違っているのをたくさん羅列しているこ

とであった。

号所収、 ばと居直り、 事を興味をもってよんだ一人であった。かれは遠藤評について、「(鷗外訳を)誤訳と称したのは向軍治氏と遠藤理学博士で、前者は文法から見れ 日夏耿之介(一八九〇~一九七一、大正から昭和期の詩人・批評家・英文学者、 引用者) 鷗外全集 後者は那威語に精通し身親しくその土を踏んだ者から見ればと、かさにかかって(上から押さえつけるように威圧的な態度をとる意 の所説であった」としている。 著作篇 第一七巻附録、 昭 11 · 12 )。 (日夏耿之介「鷗外 VERSUS 文場 のち早大教授)は、 「諸家の鷗外観」読後の文を求められて」(『鷗外研究』 『新日本』に連載された遠藤の誤訳指摘記

そして日夏は、 評者遠藤のことを 「鷗外抱月二氏を比較して屠殺評した愛嬌に富む門外漢であった」とユーモラスに呼んだ。

むすび

語力を身につけていった。が、外国語となると、子どもとおとなの中間期に書物から入っており、子どものときから自然に英語やフランス語やド すことばや読本を通じて、 大方の日本人は、 外国語を学ぶとき、活字本から入っている。われわれは母語である日本語を耳から聞いて、また学校に上ってからは教師が話 国語力をつけていった。 すなわち、 われわれ日本人は母語の世界にどっぷりとひたりながら、 自然に一定ていどの日

イツ語を覚え込んだ人々とおなじに考えるわけにはゆかぬ。

それはまるで辞書が翻訳を代行しているようなものである。南宋の儒学者・朱熹(一一三〇~一二〇〇)のことばに、「読書三到」というのがある。 できるものではない。原文を語学的に正しく解釈すること自体がひじょうにむずかしい。 三度よみ返すうちに少しづつわかりかけてくるときもあれば、最初からまったく歯が立たぬときもある。そのときは辞引のやっかいになるのだが、 読書から入った語学は、多くの短所や弱点をもつのが当然であり、つまらぬ間違いを犯す。外国文は一読しただけでは、すぐわからない。二、 この辞句の意味は、心と目を書物に集中し、口で書物をよめば、必ず中味がわかるというのである。が、外国文学のばあい、おいそれと理解

れることになる(佐々木直次郎 に舌だけでやっているため、ほとんど他に知られることはない。しかし、はっきりと紙の上に印刷された誤訳は、末代にわたって人の眼にさらさ 語学教師は、 ときに珍妙かつ愚鈍な誤訳を教場でやりながら、おく面もなく俸給をちょうだいしている。 「翻訳苦楽抄」)。 教場での翻訳は、 数十名の学生を相手

野にまで進出し、誤訳した相手を「乱訳家」として指弾した。 翻訳の事業がさかんになれば、誤訳指摘の火の手があちこちで起るのは当然である。いっとき語学の達者な人士が誤訳指摘というあら捜しの分

時代# である。 本文学史上、大きな位置をしめるものであるが、明治初年から二十年ごろの欧化主義の時代、わが国にまだ見るべき文学が現われぬころで わが国において西洋小説が文学として翻訳されたのは、西南戦争をピークとして維新以来の兵乱がおさまった明治十年(一八七七) が現出した。翻訳者は文学専攻者ではなく、政治家・官吏・教師・新聞記者らが余技的にやった。(タエ 日本はやや安堵した状態に入った。平和文明の準備段階に入り、同十五、六年ごろから新文芸の準備期がはじまった。翻訳文学は近代日 以降のこと "翻訳

第一期……明治初年から同十年代(啓蒙家活動の準備時代)

明治時代の四十五年間における「翻訳文学」の発達の跡をたどると、およそつぎの三期に大別できようか

第 期 ・明治十一年から同二十年代 (政治小説全盛期をへて、 西洋文学の紹介翻訳が盛んになる

第三期……明治二十年から同四十年代 (翻訳の進歩発達時代

注・吉武好孝著『翻訳文学発達史』(三省堂・昭和18・7)と柳田泉著『明治初期の翻訳文学』(松柏館書店、 大正元・8)を参照。

漢文と国文とをつき交ぜたような奇態な日本語であった。それはこんにちから観ると、じつに佶屈。 こと)なるものであった たく別物につくり替えた。 一期における傾向は、 あるいはおおよその意味だけを伝えようとした。またときに翻訳者は原著のタイトルや筋や人物や思想までもてきとうに脚色し、 翻訳は文化的な活動であるが、 この時期の翻訳は、 原著の主要部分のみを読者に伝えることに主眼が置かれていた。 一冊まるごと訳すのではなく、いわゆる抄訳 明治期の翻訳を大観すると、かなり蕪雑粗笨なものが横行していたようだ。翻訳文学の第 (縮訳) そのため訳者はその部分だけを選び、 (文字や文章がむずかしく、 意味のとりにくい であった。 訳文は漢文直訳体といおうか 他はすべて省 一期

でだれも手をつけなかった原文尊重主義: 7)である。このときからわが国の翻訳文学は、 了解として定められる契機となったものは、 さて本論に立ち返り、 翻訳界のこのような傾向に従い、 当初とても出来そうに思われなかった。しかし、 花袋・敏・鷗外の訳業にたいする非難の当否や瑕疵 明治26・9) またその潮流に乗って花袋や敏や鷗外などは、 の翻訳のしごとをもらったとき、 -文学作品を忠実に訳すことに努めた。 二葉亭四迷が、 新しい発展段階に入った。二葉亭は自由な言文一致(文章を話しことばに一致させた)とそれま(28) それもどうやら曲りなりに漕ぎつけた。 ツルゲーネフの『猟人日記』の一節をロシア原文から訳した「あひびき」 内心歓喜したようである。語学は不完全だし、 (欠点) についてのべてみたい。 海外文芸の紹介をおこなった。 その翻訳はめちゃくちゃであったにちがいなか まだ無名時代の花袋は、 西洋文学の翻訳の基準が暗黙の 翻訳もはじめてであっ トルストイ (明治21

語力で訳したものだけに、ときに自由にすぎ、 自由訳 かれの語学力は目覚しい進歩をとげたとは思えないが、 訳し落し、 訳し落し、 難語の使用などがみられる。 意訳、 難語の使用などである。 原作から脱線したのは欠点とすべきであろう。 鷗外のばあいはどうか。 敏のばあいはどうか、どちらも大同小異である。原文の省略 心もとない理解力でモーパッサンの短篇やキーツの詩を訳した。 非難の対照となりうる点は 創作的加筆 固有名詞の誤読、 あやふやの英 自由訳 創

った、と語っている

(田山花袋作『東京の三十年』)。

り欠点のすくなからぬものであろう」という主旨のことをある人にいったらしい 鷗外は明治三十八、 九年 (一九〇五、 六年)のごろ、 「予の若い時分の翻訳は、 (『明治文壇の人々 原文の各部分をそのまゝ伝えるという標準からすると、 三田文学』岩波ブックサービスセンター

Der Improvisator 文を省略したり、 治27・1)と、 鷗外は、「わが訳文を欧文とくらべ見て評せん人は、かならず獨逸文に依られんことを」(「我訳稿に就きて」『志がらみ草紙』第五二号所収、 『即興詩人』(春陽堂、 誤訳指摘にたいして若い時分から予防線を張っている。評家が指摘するまでもなく、その訳業はいろいろ欠点があったことは否め (Nr.814-817) 原文にない言葉を補ったりしているという(「『即興詩人』 その独訳と邦訳」『鷗外研究』第二四号所収、 明治3・9)は、原作(ドイツ訳)以上といった賛辞をうけたようではあるが、レクラム版デンハルトのドイツ訳 で鷗外訳と較べてみた沢柳大五郎(一九一一~一九九五、 ギリシャ美術および鷗外研究家)によると、 鷗外全集翻訳篇 由に原 明

昭 和 13

横丁の殺人犯」)のうち、とくに「うづしほ」(「メエルストロムに吞まれて」)の訳しぶりを吟味したことがあった。が、そのときの印象では、(28) いるといえる 外は原文の一言半句の厳密な詮議に拘泥せず、のびのびと訳していた。しかし、語学的な欠点を避けえず、訳者による潤色的加筆、 筆者はむかし、 単語の意味の取りちがえ、誤訳、 鷗外がドイツ語訳から重訳したポー(一八○九~四九、アメリカの詩人・短篇作家)の短篇三作(「うづしほ」「十三時」「病院 意識的な誇大表現などがみられた。これらの欠点の一部は、花袋や敏の訳業にも共通するものを包含して 自由訳、

平成9・6)。が、訳者のすべてが十分な力量を備えているわけではない。 があるという。かって夏目漱石は、「世人ハ翻訳シテ甘クユカザレバ - 己レノ力足ラズト思フ……」といった(「ノート」漱石全集 九~一九一二、スウェーデンの劇作家・小説家) しかし、 鷗外は過誤(あやまり)ない書物がないと同様、 の 「

職

情

鬼

」

(『歌舞伎』第一〇九号所収、 「翻訳に誤訳のない翻訳はない」ことを百も承知していた。ストリンドベリ(一八四 明治42・8) には、 意識的にごまかして訳したところ

人は、 (わがまま)な考えに捉われていたのかも知れない。かれらの眼中にあったのは一般読者であり、いまでいう自由訳もしくは翻案にちかい訳文を けっして誤訳をしたとは思っていないはずである。翻訳は原著をじぶんにとって可能な、 興味本位の読物風に仕立てた。それがまた受けた。かれらはこうした改造をいささかも後ろ暗くおもわなかったかもしれぬ。 鷗外らが翻訳において共通の過ちを犯したには、 鷗外らは、逐字訳という大きな箍 (輪)にとらわれず、自由主義的訳法にもとづき、大意だけを移せばよい、といった放 縦 何らかの理由なり原因がなければならぬが、それは何であったのか。誤訳をした当 また好きな言葉に直す半ば創作でもある。 しかし、 か

れらはたまたま運悪く、 自由訳でない真正の翻訳を求める者の歯牙にかかったといえる。

れない あった 誤訳はかえって平易なところに生ずる、という。 明治期の翻訳は、 (「原文の印象と訳文の趣致」『内田魯庵全集 (楠山正雄 「翻訳今昔」『書物展望』 いったいに不正確なものであったようだ。 第五八号所収、 原文を理解する力、 第六巻』 昭和11・4)。 所収、 あの時代の翻訳は、 ゆまに書房、 日本語の技倆に乏しい者は翻訳の筆をとるべきでない、 内田魯庵 原作をてきとうに解体し、それを半ば創作的に再生したもので 昭和59・11)。 (一八六八~一九二九、 明治期の評論家・小説家)によると、 といいたいのかも知

家・英文学者)であった。 れば、 しいことかもしれない。 ~一九四三、 外国文学を味おうとする者、 それは大きな問題であるが、 明治から昭和期にかけての英文学者) 「志言 。ある者は誤訳の指摘など恐るゝに足らぬ」といったのは、(31) また翻訳に従事する者は、 許容範囲のものであれば、 の言であるが、語学力のかん養は容易ではない。 しっかりとした語学の修養のうえに立たねばならぬ、 重版のときに訂正しておけばよい。 長谷川天渓(一八七六~一九四〇、 しかし、 冊の訳書のなかに、 本が売れぬいまの時代、 というのが、 間違いが何百箇所もあ 明治から 平田禿木 それはむずか 昭和期の評 (一八七三

苦闘を強いられている。 過程における笑い話としてすまされる大事件であった。 翻訳大国日本には、 いま翻訳の代表選手がごまんとおり、 いまはむかし、 遠い明治という時代に、 かれらは大家、中家、小家、小家、 海外文芸の紹介に尽した文士 無名家に分類される。 -花袋、 敏 鷗外らにたいする筆誅は、 みな日夜、 つの文化事業に携り、 文化移植

注

- (1) 新村出「西洋文学 翻訳の嚆矢」(『太陽』第十六巻第五号所収、明治43・3)
- (2)岩波講座 世界文学 素屬昌三『西洋文学翻訳年表』(岩波書店、昭和八年七月)、四頁。
- (3) 注(1) におなじ。
- $\widehat{4}$ 日本文学史 第十四巻 近代 太田三郎 『翻訳文学』 (岩波書店、 昭和三十四年五月)、
- (5) 唐 長孫無忌等撰『隋書經籍志』(上海 商務印書館出版、一九五五·一一)、一四四頁
- (6)岩波講座 世界文学 野上豊一郎『翻訳論』(岩波書店、昭和七年十一月)、三頁

- (7) 木村毅「翻訳文学雑考」(『早稲田文学』所収、大正14·7)
- 8 柳田泉 「明治翻訳文学概説」(『明治文学史集説』所収、日本文学社、 昭和七年六月)、一五七頁。
- (9) 木村毅『明治文学展望』(改造社、昭和三年六月)、六八頁
- (10)朝日常識講座 第八巻 土岐善麿『文芸の話』(朝日新聞社、昭和四年五月)、二二七頁
- (11)後藤末雄「フランス文学と私」(『書物展望』第五十八号所収、昭和11・4)
- $\widehat{12}$ 伊狩章「花袋とモーパッサン― -その比較研究」(『弘前大学人文社会』第四号所収、 昭和29・1)
- 13 日夏耿之介「紀季文学輸入閑話」(『明治文学襍考』所収、梓書房、 昭和四年五月)、三八九頁
- 14 二二九頁 伊狩章「日本文学とフランス文学(2)― -モーパッサンの輸入とその媒介者」『比較文学 日本文学を中心として』(矢島書房、 昭和二十八年十月)、
- 15 宇野浩二「外国文学の影響 花袋、 白鳥、 秋江」(『わが文学遍歴』 所収、 白鯨書房、 昭和二十四年七月)、 四七頁。
- (16) 注 (12) の二四頁。
- (17) 注 (15) の四九頁。
- 18 ていた、という(素人「故 高山樗牛(一八七一~一九〇二、明治期の評論家) 上田博士三周忌 上田君の思ひ出」『太陽』 は、 上田敏が語学 所収、大正7・6)。 (英独仏伊、ギリシャ・ラテンの古典語) に堪能であることに敬服の意を表し
- 19 号所収、 大場柯公(本名・景秋、一八七二~?ロシアにおいて行方不明となる、 大正3・6)に、「獨逸語に至りては京大に藤白禎輔氏あり、慶大に向軍治氏あり、早大に藤山治一氏あり、…」とある。 明治・大正期のジャーナリスト)の「日本の語学者」(『太陽』
- (20)「第三編 小説及び評論壇」(『太陽』第十五巻第三号所収、明治42・2)
- 21 が印刷所に回ったのである。 和四十七年十月)、 翻訳を口述したという非難に対して、鷗外は「原稿は私の書いたものを、 八八四頁 原稿を口述して筆写させたと云ふ人があるが、そうではない」(「不苦心談」『鷗外全集 筆工 (筆耕 報酬をえて筆写する人の意 第十二巻』 引用者)に写させた。それ 所収、 岩波書店、 昭
- (22) 『鷗外全集 第三十一巻』 (岩波書店、昭和二十七年十一月)、三三四頁
- (23)「後記」を参照。『鷗外全集 第十巻』(岩波書店、昭和四十七年八月)、六一八頁
- 24)未津八良『誤訳論』(『三田文学』所収、昭和14・7)
- (25)「明治の文学」(『新日本』第一巻第九号所収、大正元・8)

- (26) 塩田良平『明治の作家と作品』(人文書院、昭和十八年七月)、一五頁。
- (27) 柳田泉『明治初期の翻訳文学』(松栢館書店、昭和十年二月)、三二頁。
- 吉武好孝『翻訳文学発達史』(三省堂、昭和十八年七月)、八一頁。
- A Descent into the Maelsröm(一八四一年)の独訳 Im Strudel des Maelströms のこと。

29

 $\widehat{28}$ 

 $\widehat{30}$ 

小山内薫「鷗外先生の詞」(『鷗外研究』第九号所収、鷗外全集著作篇

第八巻附録、

昭和12・2)

「和訳の理想と実際」(『新潮』第十九巻第五号所収、大正2・11)

31